鞠智城東京シンポジウム

古代山城 鞠智城（きくちじょう）を考える

～国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題～

日時：平成２１年７月２５日（土）　13:00～17:00
場所：砂防会館別館　東京都千代田区平河町 2-7-5
主催：熊本県・熊本県教育委員会
後援：文化庁

目次

主催者あいさつ ・・・

御挨拶

本日は、御多用中にもかかわらず、鞠智城東京シンポジウム「古代山城・鞠智城を考える」に、多数の皆様に御参加いただき、誠にありがとうございます。

また、大韓民国大使館、並びに文化庁からも関係の方々の御臨席を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

さて、現在、熊本県では、本県の優れた文化や歴史などを再認識し、鞠智城をはじめとする貴重な文化的資産を地域の宝として磨きあげ、そして活かしていく取組を行っているところです。

鞠智城跡のある菊池川流域は、古来より豊かな恵みに育まれ、全国一の数を誇る装飾古墳をはじめ、古代文化が花開いた地域です。この地域に、我が国が、律令国家の建設を目指した七世紀後半、大和朝廷によって、古代山城「鞠智城」が築かれました。「六国史」に記載された古代山城の一つに数えられる鞠智城は、全国有数の重要遺跡として高く評価されています。

本県では、昭和42年から発掘調査を開始し、これまでに国内初となる八角形建物跡、貯水池跡、貯木場跡、木簡など貴重な遺構や遺物が数多く見つかりました。特に、昨年の10月には、貯水池跡池尻部から百済製の菩薩立像が発見されました。百済から亡命した達率が築城にかかわったとする『日本書紀』の記述を裏付ける貴重な資料として、日本国内だけでなく韓国においても大きな注目を集めました。

この歴史的に貴重な鞠智城を、くまもとの宝、さらには日本の宝としてしっかりと護り伝え、活かしていくことは、私ども今を生きる者にとって大変意義深いものであると同時に、重要な責務であると考えます。これまで県では、講座やシンポジウムなど、あらゆる機会を通じて、鞠智城の歴史的・学術的な価値について、広く周知されるよう努力して参りました。本日のシンポジウムは、その集大成ともいうべきものであります。日本古代史や朝鮮古代史など各分野の研究における第一人者の先生方から、鞠智城跡の歴史的意義と今後の課題を考えるうえで貴重なお話がお聞きできるものと期待しております。本日のシンポジウムを通して、鞠智城の歴史的な価値を、さらに全国に周知できるものと大いに期待しており、そして鞠智城跡の特別史跡指定がより確実なものになると確信しています。

最後に、本日御参加の皆様の御健勝、御活躍をお祈りいたしまして、挨拶といたします。

平成21年7月25日

熊本県知事　蒲島郁夫

御挨拶

本日は、笹山先生をはじめ講師の先生方、文化庁をはじめ関係各位の御努力により、鞠智城を全国に発信する機会を得ましたことを心から感謝申し上げます。

『隋書』倭国伝に、唐の時代までの中国正史の古代日本列島記録の中に、ただ一つの山名、山の名がでてきます。阿蘇山です。

その阿蘇の外輪、深葉山を源として69の支川を飲み込み、有明海に注ぐ延長71kmの一級河川があります。菊池川です。

鞠智城はその中流域(河口まで40km)、山鹿市を中心に一部が菊池市にかかる中心標高145m、敢えて申し上げれば北緯33度00分10秒、東経130度47分00秒の丘陵地に築かれた古代山城です。

この菊池川は肥沃な菊鹿平野、玉名平野を育み、流域面積は 996ｋ㎡もあり、ここで生活を営んだ先人の足跡は、チブサン、弁慶ヶ穴の装飾古墳として光芒を放っています。全国で660を数える装飾古墳のうち熊本県にはその３割の196基が所在し、うち６割の117基は菊池川流域に集積しています。

熊本県はここに全国唯一の県立装飾古墳館を立ち上げました。ここが歴史公園鞠智城・温故創生館の本館です。

そして河口まで14ｋｍという下流域左岸、和水町（旧菊水町）の清原台地には、歴史・考古学に関心のある皆様熟知の江田船山古墳があります。銀象嵌の太刀はもとよりのこと、出土品は点数ではなく件数で登録されており、92 件すべてが国宝です。金製・金銅製の装身具、冠帽、冠、沓、帯、金の耳飾は百済製と云われており、金銅製沓、金製耳飾は、日本に佛教がもたらされる以前の百済25代武寧王陵出土の副葬品と類似していると云われています。

鞠智城は、その場所を熊本県の北部に位置し、と申し上げればすむことでしたが、講師の先生方のお話をより深く理解していただくために、鞠智城を温かく取り囲む菊池川沿いの先人の歴史的背景を敢えて申し上げ、熊本県民の願いである特別史跡指定、そして国営歴史公園実現のための皆様方の熱い御声援をお願いして、私の御挨拶に代えさせていただきます。

平成21年7月25日

熊本県文化財保護協会会長　古閑三博

鞠智城東京シンポジウム

古代山城　鞠智城を考える

～国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題～

日時：平成２１年７月２５日（土）　13:00～17:00
場所：砂防会館別館１階会議室
　　東京都千代田区平河町 2-7-5
主催：熊本県・熊本県教育委員会
後援：文化庁

シンポジウム日程

13:00　開会

挨拶

熊本県知事　蒲島郁夫

熊本県文化財保護協会会長　古閑三博

来賓紹介

13:15　基調講演

「鞠智城と古代の西海道」　笹山晴生（東京大学名誉教授）

14:15　発表

①「鞠智城跡の調査と整備」　大田幸博（熊本県立装飾古墳館長）

②「古代山城としての鞠智城」　岡田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

③「古代史からみた鞠智城」　佐藤　信（東京大学大学院教授）

④「朝鮮古代史からみた鞠智城」濱田耕策（九州大学大学院教授）

15:50　パネルディスカッション

コーディネーター：大田幸博

パネラー：岡田茂弘・佐藤　信・濱田耕策

17:00　閉会

講演者・発表者紹介

笹山 晴生（ささやま はるお）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修了。
名古屋大学講師、名古屋大学助教授、東京大学教養学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、東京大学文学部教授となる。1993 年、定年退官後、学習院大学文学部史学科教授も務める。東京大学名誉教授。専門は、日本古代史。文学博士。
主な著書に、『古代国家と軍隊～皇軍と私兵の系譜～』講談社学術文庫 2004（中公新書としては 1975）、『日本古代史講義』東京大学出版会 1977、『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会 1985 など、著書・論文多数。

岡田 茂弘（おかだ しげひろ）

千葉大学文理学部地学科卒業。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。
奈良国立文化財研究所技官、宮城県多賀城研究所長、国立歴史民俗博物館教授・考古研究部長を経て、東北歴史博物館長となる。1999 年より、国立歴史民俗博物館名誉教授。2008 年まで、学習院大学史学部桜史会会長。専門は、日本歴史考古学。
主な著書に、『多賀城』中央公論美術出版 1977、『古代遺跡の旅　古代史博物館』（共著）講談社 1981、『古代の都を復元する』（編書）学習研究社 2002、『古代を考える　多賀城と古代東北』（共著）吉川弘文館 2006 など、著書・論文多数。

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。
奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、1996 年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は、日本古代史。文学博士。
主な著書に、『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館 1997、『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会 1999、『出土史料の古代史』東京大学出版会 2002、『古代の地方官衙と社会』山川出版社 2007 など、著書・論文多数。

濱田 耕策（はまだ こうさく）

北海道大学文学部史学科卒業。学習院大学大学院人文科学研究科博士課程修了。学習院大学助手を経て、現在、九州大学大学院人文科学研究院教授。専門は、朝鮮古代史。博士（史学）。
主な著書に、『渤海国興亡史』吉川弘文館 2000、『新羅国史の研究－東アジア史の視点から－』吉川弘文館 2002 など、著書・論文多数。

大田 幸博（おおた ゆきひろ）

学習院大学法学部卒業（史学部所属）。県立大津産業高校教諭、鞠智城発掘調査主任（1988 年～94 年）、熊本県教育庁文化課課長補佐、歴史公園鞠智城・温故創生館長を経て、現在、熊本県立装飾古墳館長。長年、鞠智城跡の調査と整備に携わる。
鞠智城跡関係の論文多数。

《基調講演》

鞠智城と古代の西海道

笹山晴生（東京大学名誉教授）

はじめに

鞠智城は7世紀につくられた朝鮮式山城で、文武天皇2年（698）条の『続日本紀』に、大宰府に命じて大野・基肄・鞠智3城を修繕させるとあるのが文献上の初見である。その後平安時代の初め、天安2年（858）条の『日本文徳天皇実録』に、菊池城院の兵庫がおのずから鳴ったという記事、また同城の不動倉11宇が火災にあったという記事が見える。

鞠智城跡は熊本県の東北部、熊本県菊池市・山鹿市にあり、史跡に指定されている。近年の発掘調査によって土塁や石垣、城門・倉庫・官衙施設などの遺構の分布や全体の構造がしだいに明らかにされ、整備も進められつつある。それとともに、古代山城としての鞠智城の存在意義についても、あらためて問題が提起されている。

鞠智城の歴史的な意義を正しく捉えるためには、鞠智城が設置された当時の歴史的な状況について、九州＝西海道全体の広い視野から見てみる必要がある。

(1) 鞠智城の地理的位置

菊池の地は古代律令制のもとでは肥後国菊池郡に属し、古くは「くくち」と訓まれたらしい。鞠智城の跡に立って望むと、東には阿蘇の山並みが連なり、南から西にかけては広大な熊本平野が広がる。西は遥か、有明海を隔てて雲仙を望むことができる。

谷を刻んで西に流れるのが菊池川で、玉名で有明海に注ぐ。この菊池川は、古代における朝鮮・中国からの文化輸入の一つの経路であった。玉名郡の江田船山古墳出土の太刀の銘には、5世紀後半の倭王武（雄略天皇）と推定される「獲加多支鹵大王」の名が見え、倭の五王時代にこの地の豪族が倭政権と関わりを持っていたことを物語っている。この地域にはまた、山鹿市のチブサン古墳など多くの装飾古墳も見られ、独自の文化の様相を示している。

玉名から菊池にかけての地域は、九州の北部から中部・南部へと至る陸上交通の要地でもあった。律令時代の官道である駅路は、大宰府から筑後国を経てこの地に至り、熊本平野に入って、東方、阿蘇を経て豊後国に至る道、西方、有明海を渡って肥前国に至る道を分け、さらに南下して葦北・球磨などを経て薩摩・日向へと向かっていた。阿蘇には阿蘇山を神として祀る阿蘇国造がおり、葦北の地には有明海を通じて海外とも交渉を行っていたと推測される火葦北国造がいて、ともに律令制成立以前には、在地に大きな勢力を有していた。さらに7～8世紀には、南方の日向・大隅・薩摩、多褐・屋久・奄美など薩南諸島へと律令制的支配を進めることが国家の大きな課題となった。肥後国はこうした政略の基点としての役割を担ったのであり、鞠智城の地は、九州の北から南への交通路を押さえ

る要地として、重要な位置を占めたと考えられる。

(2) 7世紀の日本と鞠智城の設置

古代山城としての鞠智城の設置は、7 世紀の東アジア・日本（倭国）の情勢と深く関係している。

7 世紀の東アジアは、大きな動乱の時代を迎えていた。6 世紀末の隋による南北両朝の再統一を受け、7世紀には唐の帝国がめざましい発展を遂げて、周辺諸国に大きな威圧を与えた。朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の諸国はそれぞれ自国の権力の集中化を図り、ために相互の対立が激化した。

高句麗・百済による侵略に苦しんだ新羅は唐と連携し、斉明6年（660）、将軍蘇定方の率いる水陸 10 万の唐軍は新羅軍と連合して百済を攻撃した。王都泗沘城は陥落し、義慈王は逃れて旧都熊津城に拠ったがここも陥落し、国王・太子らは捕らえられて唐に送られ、百済は滅亡した。

しかし百済の故地では、その後も鬼室福信らの遺臣が任存山城などに拠って唐軍に抵抗した。福信は倭国に軍事援助を求めるとともに、倭にあった王子扶余豊（豊璋）を迎えて国王とすることを乞うた。朝廷は遺臣の反乱を援助することに決し、斉明天皇・皇太子中大兄皇子らは九州に赴き、天智元年（662）には安曇比羅夫・阿部比羅夫らを将とする大軍を朝鮮に送り、軍需品を援助した。しかし天智 2 年（663）8 月、倭の水軍は劉仁軌らの率いる唐の水軍と白村江に決戦し、兵船 400 艘を焼かれる決定的な敗北を喫した。倭軍は多くの百済人を伴って帰還し、朝鮮の戦乱への軍事的な介入は完全に失敗した。

白村江の敗戦後、天智天皇の朝廷は、唐・新羅の侵攻に備え、西辺の防備を強化するための施策を次々に実施した。天智 3 年（664）以降、朝廷は最前線にあたる対馬・壱岐に防人と烽とを置いて敵襲に備え、大宰府の前面には防御施設としての水城を築いた。大宰府に近接する大野・基肄 2 城のほか、対馬の金田城、長門、讃岐の屋島、大和・河内国境の高安城など、大和に達する行路の要衝にも城を築いた。これら西日本の城は、大野城・基肄城などの遺跡によって知られるように、山頂の周囲に土塁をめぐらし、谷間を石垣で埋め、水門を設け、内部には倉庫などの礎石建物を配置した朝鮮式の山城であった。天智 4 年(665)、大野城・基肄城を造るために筑紫に派遣されたのが憶礼福留・四比福夫という兵法に詳しい百済の貴族であったことが示すように、天智朝の軍事的諸施策を指導したのは、白村江の戦いののち倭国に亡命してきた百済の王族・貴族であった。

大野城や基肄城に比べ、鞠智城については『日本書紀』に築城に関する記述が見られない。しかし発掘調査によれば、鞠智城はまさしく大野城・基肄城などと共通する朝鮮式山城としての特徴を備えている。平成 20 年（2008)度の発掘調査で、貯水池跡から 7 世紀後半と推定される青銅製の百済系菩薩立像が出土したことは、鞠智城の築造と百済人技術者との関係を示唆するものと言えるのではなかろうか。

(3) 西海道の行政・軍事と鞠智城

鞠智城の築造は、7 世紀後半の東アジアの緊迫した情勢の中で行われたと考えられるが、その後東アジアの情勢は、唐・新羅・日本の関係としてしだいに安定の方向へと向かった。国内では 672 年の壬申の大乱後、乱に勝利した天武天皇によって中央集権国家の建設が強力に推進され、大宝元年（701）には国家制度の基本を定めた大宝律令が制定された。

律令制のもとで、九州＝西海道の行政は大宰府によって統括された。西海道では他の諸道とは異なり、大宰府による強力な権力集中のシステムが構築されたのである。大宰府は外交・軍事にも携わり、財政の面でも、西海道諸国の調庸はすべて大宰府に集積され、その一部が都に貢上されることになっていた。

西海道には、大宰府を中心とする交通・通信のネットワークが形成されていた。西海道の駅路は大宰府を中心に諸方面に向かう形で形成され、駅路に沿って駅家のほか、郡家や諸官衙施設が計画的に配置されていたことが推測される。情報伝達の手段としては、烽が各所に設置された。烽については豊後・肥前 2 国の『風土記』に、烽の総数、郡ごとの数が記載されており、肥前国（佐賀県・長崎県）では、現地調査や「日の隈山」などの遺称から、その所在地、国府や基肄城に至るルートの推測がなされている。

西海道防衛のための軍事力としては、まず防人が挙げられる。律令制のもとでの防人は諸国軍団兵士の中から選抜され、3 年交替で筑紫に派遣されてきた。その数は 2000 人から 3000 人に及んだと推測される。8 世紀を通じ、防人のほとんどは東国＝中部・関東地方出身の兵士であった。東国の兵士はその勇敢さを買われ、鎮兵として東北の戦乱の鎮圧にも動員されたから、その負担は大きく、8 世紀の後半には防人制の維持はしだいに困難になっていった。

防人がどこに配置されたかについては、詳しくは分からない。サキモリは「前守」「崎守」の意味であり、最前線の海岸を守衛するのが本来の任務であって、それは天智 3 年（664）に対馬・壱岐に最初に設置されたことからも窺われる。防人が最後まで配置されていたのも対馬であった。佐賀県唐津市の中原遺跡から近年出土した木簡に「甲斐国〔津〕戍〔人〕」とあるのは甲斐国出身の東国防人を意味し、防人配置の具体的な事例として貴重な史料である。

鞠智城に防人が配備されていたかどうか。7 世紀後半の築城当時には配備されていた可能性もあるが、本来の防人の任務から見て、また防人制の維持がしだいに困難になっていった情勢から考えて、8 世紀以降の鞠智城守備の武力の主体は防人ではなく、西海道出身の軍団兵士と見るのが妥当なように思われる。

軍団の兵士は律令制国家の武力の主体であった。20 歳以上の男子を 1 戸から 3 人に 1 人の割合で兵士に徴発し、近くの軍団に勤務させるもので、1 軍団には普通 1000 人の兵士が所属していた。

西海道については、『類聚三代格』所載の弘仁 4 年（813）8 月 9 日の太政官符によって、当時筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後計 6 国に 18 の軍団があり、17,100 人の兵士が

所属していたことが分かる。この数はほぼ8世紀初頭の軍団兵士制成立期まで遡ると考えられる。具体的な軍団名としては、遠賀（筑前）・御笠（同）・基肄（肥前）・益城（肥後）各団の名が諸史料によって知られるが、このうち肥後国益城団の名は、昭和59年（1984）に平城宮跡から出土した「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた木簡（題籤軸）によって知られるものである。これは養老7年（723）に益城団に所属した全兵士の名簿の巻軸だけが残ったもので、当時の政府が兵士一人一人の名まで把握していたことを具体的に示す、貴重な史料である。

鞠智城と軍団との関係についてはどのように考えられるのか。筑前国の御笠団については大野城、肥前国の基肄団については基肄城との関係が考えられる。恐らく山城の付近に存在し、兵士の訓練などが行われていたのであろう。そこから類推すれば、鞠智城の場合にも、付近に軍団が存在した可能性がある。前掲の弘仁4年太政官符によれば肥後国の軍団数は4であり、平城宮跡出土木簡には「肥後国第三益城軍団」とあるから、肥後国北部の玉名・山鹿・菊池3郡のどこかに、少なくとも一つの軍団が存在したと思われる。

これらの軍団は、兵士を率いて交替で鞠智城に勤務し、その守衛に当たったほか、国司のもとでさまざまな任務に従ったものと考えられる。『日本紀略』弘仁4年3月辛未条で、肥前国基肄団の校尉が五島に来着した新羅人を捕らえる仕事に当たっているのは、その一つの例であろう。

おわりに

鞠智城は9世紀の後半まで存続し、天安2年の『日本文徳天皇実録』の記事によれば兵庫（武器庫）が存在し、また11宇以上の不動倉があって、大量の稲穀が蓄積されていたことが窺われる。古代山城としての鞠智城の機能は、律令時代を通じて維持されていたと言えよう。

西海道は日本と東アジア世界との接点として、8世紀から9世紀にかけてもいくどか緊張した事態に見舞われた。日本と朝鮮の新羅との間にはしばしば衝突がおこり、天平宝字3年（759）から同6年にかけては、安史の乱による唐朝の混乱に乗じて新羅を征討する計画が藤原仲麻呂によって計画され、兵士や水手・船舶の大規模な動員が行われた。9世紀に入ると国家の統制力が衰え、朝鮮・中国との間の人や物資の交流が盛んになるが、新羅国内の動揺から九州沿岸には海賊がしばしば襲来し、沿岸の警備が大きな課題となった。

しかし東アジア全体の視点から見ると、唐を中心とする東アジアの政治的秩序は9世紀に入ると崩壊し、諸国家はそれぞれ内部で動揺を抱え、国家間の激しい抗争は起こらなくなった。それに対応して日本でも、8世紀末には軍団兵士制が辺要を除いて廃止され、防人制も9世紀に入って衰退した。土塁や石垣で防備を固めた朝鮮式山城である鞠智城も、9世紀にはしだいにその存在意義を失っていったのである。

《発表①》

鞠智城跡の調査と整備

大田　幸博（熊本県立装飾古墳館長）

１．概要

熊本県の鞠智城は、北九州の大野城（福岡県）や基肄城（佐賀県）と異なり、築城時期に関する国書の記述が無く、『続日本紀』の文武二年（698）五月の条に、前出の二城と修理に関する記事を初見とする。その後、160 年間の空白期間を経て『文徳天皇実録』の天安二年（858）の二月と六月の条に、怪奇現象を伝える 3 回の記述があり、『日本三代実録』の元慶三年（879）三月の条を最後に、国書から姿を消す古代山城の一つである。文献上での城の存続期間は、181 年間となる。一方、修理時期が、大野城と基肄城と同時期であるため、築城時期もこの二城と同じ天智三年（665）とする見方が有力である。

城の性格は、築城時期の 7 世紀後半と、廃絶される終末期の 9 世紀後半とでは、明らかに違いがあろう。前者は、東アジアの国際情勢の緊張が、極度に緊張した中で築城されたもので、国家防衛網の一翼を担っている。後者は明らかに国家存亡の危機が去った後であり、既に、城塞としての役割を終えた時期である。それでも、なお城の廃絶とはなっておらず、性格の変化が考えられる。

真の城域の総面積は 55ha、東京ドームの 12 個分の広さがある。土塁線と崖線で囲繞された範囲は、外周 3.5km、中心標高 145mの台地に築かれている。城域は、県北の山鹿市菊鹿町の米原台地を中心に展開しており、縁部は、菊池市木野・堀切まで広がりを見せる。

鞠智城跡は、1967 年から発掘調査を実施しており、2009 年度で 31 次を数える。一方で、1994 年度からは調査成果を元に歴史公園として整備されており、現在も園路を中心とした整備事業が進行中である。この間、2004 年 2 月には、国指定史跡となった。今日、ガイダンス施設の「温故創生館」を軸にして、発掘調査で検出された 72 棟の建物跡の内、八角形鼓楼・米倉・兵舎・板倉など 4 棟の古代建物が復元され、これまでに 100 万人を越える入館者で賑わっている。

２．発掘調査の経緯

発掘調査は 1967 年を皮切りとする。調査の契機となったのは、長者原地区で行われた畑地の水田化工事と長者山の一部開発で、建物跡の礎石が数多く発見されたことによる。1969 年までに、調査団形式で 4 次を数える調査が行われ、長者原地区の宮野礎石、西側土塁、深迫門跡、池ノ尾門跡などで精力的な調査が展開された。1979 年の第 5 次調査は菊鹿町教育委員会で実施された。町道の改良工事に伴うもので、軒丸瓦片が出土した。1980 年の第 7 次調査では、宮野礎石建物跡を全面露出し、この結果を元に、1981 年 11 月 11 日付けで県史跡に追加指定した。1987 年の第 9 次調査では、長者山礎石群の溝跡から多

量の炭化米が出土した。

1990 年から 1992 年の第 12～14 次調査では、従前の文化庁国庫補助事業に加えて、県の自主事業による重要遺跡確認調査を実施した。調査面積も飛躍的に拡大し、その事もあって、1991 年の第 13 次調査では、構造の異なる 2 棟の八角形建物跡を検出した。国内の古代山城では初の発見であった。韓国京幾道の二聖山城跡から、類似の八角形建物跡が検出されていることが分かり、視察のために調査員が渡韓する等、鞠智城にとって画期的な年になった。1992 年の第 14 次調査では、鞠智城の終末期（9 世紀代後半）にあたる礎石建物跡を確認した。

1993 年の第 15 次調査からは、再び、文化庁国庫補助事業の発掘調査になった。同年の調査では、町道から東上の上原地区が遺構の空白地帯である事が判明した。1994 年の第 16 次調査では、深迫門跡の谷部を閉じる様に版築土塁を検出した。

1995 年から 1997 年の第 17～19 次調査では、長者原地区から計 14 棟の建物址（50～66 号）を検出した。第 19 次調査では、谷部から貯水池跡を発見した。文字が判読出来る 1 号木簡や、建築材や木製の農耕用具などが出土した。八角形建物跡に続き、これも国内の古代山城では、初めての発見であった。

1998 年から 2000 年の第 20～22 次調査では、貯水池跡の継続調査と堀切門跡の調査を行った。第 20 次調査では、貯水池跡が建築材などを備蓄した貯木場でもある事を確定した。第 22 次調査では、湧水地点から井戸枠に該当する木組み遺構を検出した。さらに堀切門跡の調査では、斜面部の凹地から門礎石の原位置も把握した。

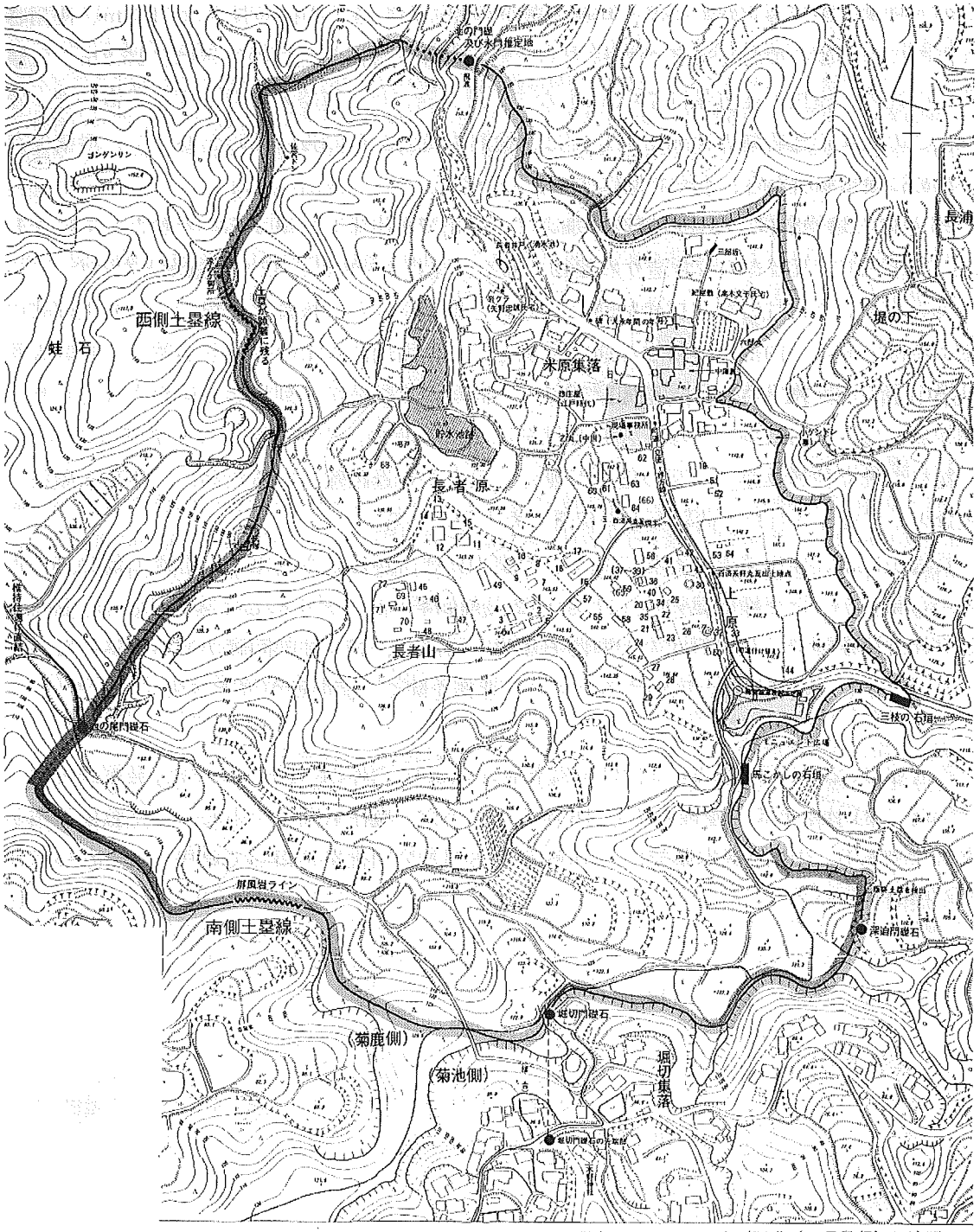
2001 年から 2003 年の第 23～25 次調査では、貯水池跡に加えて、土塁線の調査を行った。第 23 次調査では、崖線の南側土塁線が版築土塁であることを明らかにした。長者山の西地区からは、4 棟の建物址（69～72 建物址）を検出した。貯水池跡からは、堤防状遺構を確認した。第 25 次調査では、西側土塁の一部が版築土塁であることが判明した。

2004 年から 2005 年の第 26～27 次調査では、池ノ尾門跡から谷間を仕切る石塁の一部や、通水溝、導水溝を検出した。

2006 年の第 28 次調査は、深迫門跡を調査した。2007 年の第 29 次調査では、南側土塁線の東端平坦部で版築盛土の一部を検出した。さらに貯水池跡の池尻部では、
石積みを伴う堰堤の存在が分かり、2008 年の第 30 次調査では、その池岸近くから、百済系菩薩立像が出土する画期的な発見があった。

3．鞠智城の整備

発掘調査は、2009 年で 31 次を数えるが、これに伴って、城跡の保存と活用を計るために、熊本県では、1994 年から 4 ヵ年計画で城跡地の用地取得を行った。城の総面積 55ha の内、米原集落、墓地、上原地区の営農地を除く、43.5ha を対象とした。遺構の空白地帯と判明した上原地区では、県農政部が畑地を施策開田して地権者に便宜を計る方策を取った。これが用地買収の決め手になった。



整備事業は、1996 年から開始した。遺構を厚さ 1.5～2.0mの客土で保護した後に、4 棟の復元建物を建設した。八角形建物跡については、鞠智城跡保存整備検討委員会で特に多くの議論を重ねたが、最終的に中国や朝鮮半島にルーツを持つ「鼓楼」と推論した。六国

史の『日本文徳天皇実録』には、兵庫の鼓との記述がある。心柱の長さは15.3m、使用されたのは地元産の樹齢180年の檜材であった。宝珠を含んだ全体の高さは、15.8m。三層造りの瓦葺き屋根の総重量は76tにもなる。最上階には、連絡のための太鼓を置いた。なお、この八角形建物跡の復元に際しては、検討委員会からの強い勧めがあって、遺構保存のために検出場所から、やや北側にずらしている。

20号礎石建物跡は、総柱の構造に加えて、炭化米が出土した事から、米倉として復元した。高床式で、瓦葺きの校倉造りの建物である。瓦葺き屋根は、32tの重量となった。

長方形をした側柱の掘立柱建物跡は、兵舎と推定された。板葺き屋根で、つり上げ式の窓が特徴である。内部を縦断する通路を境として、両側に兵士のベットが並び、収容人員は50名程度と推定される。発掘調査では、同類の建物跡が並列状態で検出されており、鞠智城には、ある時期、少なくとも2棟分に100名程の兵士が駐屯していた事が分かる。

総柱の掘立柱建物跡は、瓦の出土が無く、兵舎から近距離にあるために、茅葺き屋根の板倉として復元された。武器などを保管したと思われる。

長者山には、検出遺構を参考にして、木造の休憩所が建設された。宮野礎石建物跡の近くから見つかった寝殿風建物跡（11号・12号建物跡）をモデルにした施設である。礎石・掘立柱併用建物で、正方形状の大型礎石建物の周囲を、掘立柱の回廊が巡る構造になっている。ただし、復元建物と区別するために、北側を除く三面の壁がガラス張りである。

鞠智城は、2004年2月27日付けで官報告示により、国指定史跡となった。発掘調査は、今年度で31次を数え、整備事業も16年目に入った。現在も園路を中心とした整備事業が進行中である。また、熊本県では、2006年から国営公園化を目指して県民一丸となって運動を展開している。

《発表②》

古代山城としての鞠智城

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

１．城とは何か

『説文解字』(中国後漢許慎撰)に「城は以って民を盛る也」とあり、『大漢和辞典』(諸橋轍次著)は城の字義を①都市を囲むくるわ、内を城、外を郭という。②都、国、国の都とする。つまり中国では城は都市を囲む城壁、城壁で護られた都市の意味である。古代西アジアや中世イスラムの都市もほぼ同様である。ヨーロッパでも古代ギリシャの都市国家は同様であり、ローマ帝政時代には加えて軍団駐屯地の城塞や長城が造られた。中世ヨーロッパでは領主の邸宅等を城壁で囲んだ Castle(英)、Chateau(仏)があり、イスラム都市の影響を受けて城郭都市も誕生した。一方、朝鮮半島では三国時代から多数の山城が造られて戦乱時に官吏や住民の避難・篭城に使用された。

『広辞苑』(新村出編)は城を「敵を防ぐために築いた軍事的構造物」とするが、軍事に限定できず、むしろ「城とは、政治目的で択ばれた土地に設けられた防御的構造物」であり、遺跡を城跡と判断する基準は、「防御的構造物－自由な出入を規制する施設の存在」である。

２．日本古代の城

日本の古代－７～９世紀に日本列島の東と西に城柵がつくられていた。『日本書紀』での恒常的な城柵の初見は大化３年(647)越(新潟県)に造られた渟足柵(ぬたりのき)で、翌年の越の磐舟柵(いわふねのき)、斎明天皇４年(658)の都岐沙羅柵(つきさらのき)と日本海沿岸東北部の柵が続き、蝦夷に備えて柵戸(きのへ)を置いた事が見える。一方、西日本の古代城は天智天皇２年(663)の白村江敗戦直後に唐・新羅軍の侵攻を予期して同３年(664)対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に防人・烽を置き、筑紫国(福岡県)に水城(みずき)を築いたのが嚆矢で、翌年長門国(山口県)、筑紫国(福岡県)の大野城(おおののき)・基肄(椽)城(きいのき)(福岡・佐賀県)を亡命百済官人の指導で築城し、同６年(667)倭国(奈良県)に高安城(たかやすのき)、讃岐国(香川県)山田郡に屋島城(やしまのき)、対馬国に金田城(かなたのき)を築城、さらに同９年(670)に長門国(山口県)に１城、筑紫国(福岡県)に２城が築城された。また、史書に築城年代の記載がないが、この頃に大津京の在った近江国(滋賀県)に三尾城、備後国(広島県)に茨城・常城、大宰府管内に三野城・稲積城等が築城されていたことが知られ、肥後国(熊本県)の鞠智城もその一つである。天武天皇８年(679)には難波京に羅城が設けられた。

８世紀には、西日本では城の修理と停廃が行なわれ、新規築城は神護景雲２年(768)完成の筑前国(福岡県)の怡土城の他、大宝２年(702)唱更(＝薩摩)国(鹿児島県)に国司の奏言で建てられた柵があるに過ぎない。これに対して東北日本では、和銅２年(709)初見の出羽柵と天平５年(733)移転後の秋田城、養老５年(721)前後に陸奥国(宮城県)に相次いで建造された多賀柵と玉造柵等五柵、天平宝字３年(759)造営の陸奥国(宮城県)の桃生(ももの う)柵(城)、同

年出羽国(秋田県)の雄勝(おがち)柵(城)、神護景雲元年(767)の陸奥国の伊治(これはり)城、宝亀11年(780)造営の陸奥国覚鼈(かくべつ)城が相次いで造営され、9世紀初めには北上川中流域の陸奥国(岩手県)に胆沢城・志波城・徳丹城が造られた。

東北日本の城柵は、7世紀～8世紀中葉には「柵」と書かれ、西日本のそれは「城」と書かれた。それ以降は東西ともに「城」と書かれるが、造営の表現では西日本の「城」は例外なく「築城」であり、東北日本の多くは「造城(柵)」あるいは「作城(柵)」であって、「築城」と記載された例は皆無である。造営に関する官職名も天平神護元年(765)大宰大貳佐伯今毛人が「築怡土城専知官」に任命されたのに対して、延暦21年(802)坂上田村麿は「造陸奥国胆沢城使」を命じられており、性格の相違を示している。また、東北日本の城柵には7世紀中葉から「柵評(きのみやつこ)」、出羽柵・多賀柵・秋田城等での国司、胆沢城での鎮守府官人の常駐が史料から窺え、城柵跡の中に政庁の遺構があるが、西日本の城では築城・修理時以外には官人常駐の記事は無く、倉庫の遺構はあるが政庁跡は確認されておらず、古代城の東西の差違を物語っている(註1)。

3．神籠石系山城と朝鮮式山城

近畿地方から九州地方北半部にかけて分布する古代山城は、神籠石系山城と朝鮮式山城とに大別されている。朝鮮式山城とは、史書に城名・築城年代が記される7世紀後半の山城で、百済の亡命官人が指揮に当ったことが知られ、朝鮮半島の三国時代の山城に形態・構造が類似するものである。大宰府の北と南の山上に築かれた大野城・基肄(椽)城が代表例である。神籠石系山城は、兵庫県以西の瀬戸内海沿岸から九州北部に分布する史書に記載の無い古代山城跡で、明治31年(1898)に筑後国(福岡県)久留米市の延喜式内大社高良山玉垂神社境内に「神籠石」と呼ばれる切石列の存在が学会誌に報告され、その性格を巡って霊域説と古代山城説が対立、明治末年から大正初年にかけて論争され、類例が各地で報告された。今日では古代山城跡と認識されるが、築造年代は6世紀説から10世紀説まで、築造者も大和国家説・地方豪族説・朝鮮半島からの渡来人説等、多様な論が提起されている(註2)。

現在、西日本各地で列石・石塁や水門をもつ史書には記載の無い古代山城跡が発見され、発掘調査によって使用年代は7世紀後半から8世紀と認定されるので、朝鮮式山城と年代的に大差は無い。大野城跡・基肄城跡が南北の高い山上にある大宰府跡でも、東方の宮地岳(標高339m)で無名の古代山城跡が発見されている。これらの西日本の古代山城は立地や構造等によって様々に分類されるが、大観すると国府・郡家等の古代官衙跡の近くに所在し、朝鮮半島の山城と同様に、その多くは戦乱時に官人・住民が避難する「逃げ込み城」としての機能を想定して築造されたと考えられる。

4．古代山城としての鞠智城

鞠智城は築造年代こそ史書に明記されないが、文武天皇2年(698)に繕治が『続日本紀』に見え、発掘調査により大野城と同年代の築造が推定さるから、朝鮮式山城の一つとすることができる。その城郭施設も、大野城跡等では山の尾根線上では土塁が築かれ、谷を通

過するところでは石垣が築かれて、各所に石垣を伴う城門、基肄城跡では石積の水門があり、鞠智城跡でも顕著な石垣は無いものの地山削り出しや版築の土塁があり、東西南の３ヶ所で城門跡、西城門跡近くに石積の水門跡が発見されている。城内施設として大野城跡・基肄城跡では多数の礎石建倉庫跡群が在るが、鞠智城跡でも城内の各所に倉庫跡群が存在し、炭化米の出土から『文徳実録』天安２年(858)５月の「菊池城の不動倉十一宇火く」の記事を裏付けている。

一方、鞠智城跡には他の古代山城跡とは異なる点もある。まず、①立地では、神籠石系山城を含む古代山城跡が玄海灘・瀬戸内海・有明海に面する高い山にあるのに対して、鞠智城跡は海から離れた内陸に位置する。大野城跡・基肄城跡や把木神籠石も内陸部に在るが大宰府や朝倉宮との関係で理解できる。鞠智城跡は内陸に立地するだけでなく附近に有力な官衙施設が無い。強いて挙げれば南方 3.5km にある菊池郡家跡と推定される西寺遺跡位である。②城の選地も、古代山城跡の多くは標高 300m 前後の山上あるいは下り尾根に在るが、鞠智城跡は最高所でも標高 169m、谷口の最低所は 100m 前後、平均 140m 前後の比較的平坦な台地上にある。③城内の施設遺構では鞠智城跡以外の古代山城跡での城内の発掘調査が進んでいないため単純な比較は困難だが、鞠智城跡では倉庫跡である総柱の掘立柱や礎石建の建物跡の他に、側柱だけの掘立柱建物跡が比較的多く存在し、未確認ながら政庁跡かと推定される整然と並んだ掘立柱建物跡群も発見されるに対して、他の古代山城跡では発見されていない。２基発見された平面八角形の掘立柱建物跡も、鞠智城跡のみである。それ故、鞠智城跡は他の古代山城とは異なっている。

ここで想起されるのが東北日本に分布する古代城柵である。東北日本の古代城柵跡は、平坦地あるいは比高数十mの台地上に選地し、多くは築地塀あるいは材木列による区画施設で囲まれているが、門付近や谷を横断する区画施設には石垣を伴う例もある。城内にはコの字形に建物を配置した政庁の遺構と、曹司や兵舎と推定される掘立柱建物跡群が倉庫跡とともに発見されている。東北日本の古代城柵は、律令国家の辺境統治に関わる国府自体や鎮守府などの国家的な統治機能をもった施設と考えられている。これに類似する施設を持つ鞠智城跡は、他の古代山城とは異なり戦乱時の避難場所ではなく、地域統治の拠点としての機能を有したと考えられる。その機能とは何か？

鞠智城跡は、肥後国府と推定される託麻国府(熊本市)から遠い上、延喜式に記載された西海道(九州地方)の官道からも逸れているため、従来その性格が明らかでなかった。歴史地理学者の木下良(註 3)は、菊池郡内に遺存する「車路」地名に着目し、鞠智城と肥後国府を連絡する延喜式以前の古代官道を推定した。これを受けて鶴嶋俊彦(註 4)も「車路」地名の調査から筑後・肥後国境の大水駅から東行して鞠智城の南方を通過し、肥後国府に至る車路本線と、分岐して豊後を抜け日向国に至る車路豊肥支路を推定している。南九州が西の薩摩国と東の大隅国に分かれることは知られているが、薩摩国の成立は大宝２年(702)の隼人(はやと)による反乱鎮圧後であり、大隅国は和銅６年(713)日向国の４郡を割いて建国されたもので、鞠智城築造時には両国は存在せず、隼人の居住地域であった。熊本県内に遺存す

る「車路」地名は歴史地理学者の推定通り、延喜式西海道以前に、鞠智城と大宰府、肥後国府、豊後を抜けて日向国を結んだ古代官道の痕跡を示すとすれば、その中心に位置する鞠智城は、大宰府の意を受けて南九州を統治するための築城と考えることができる。

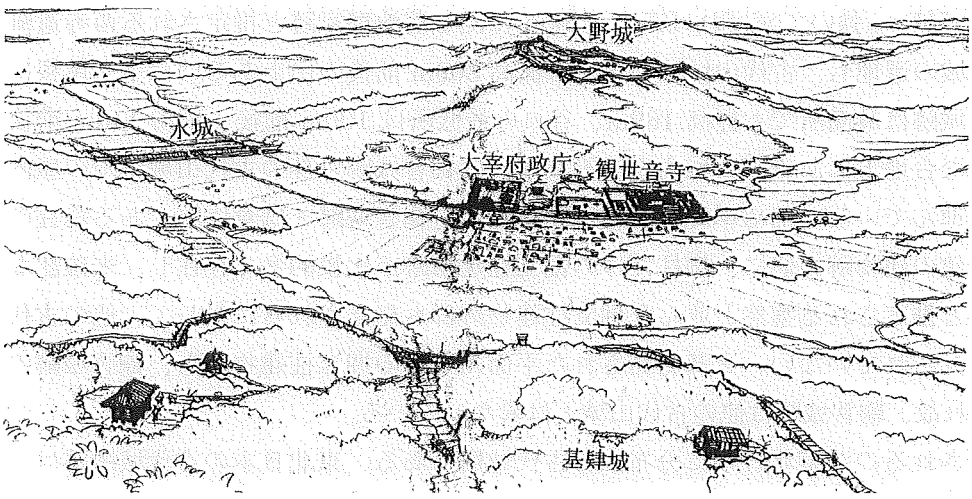
鞠智城跡は、律令国家の九州統治に於いて、大野城等の古代山城跡に勝るとも劣らぬ重要な価値を秘めた遺跡である。

註１　青木和夫・岡田茂弘編『古代を考える　多賀城と古代東北』2006 年　吉川弘文館

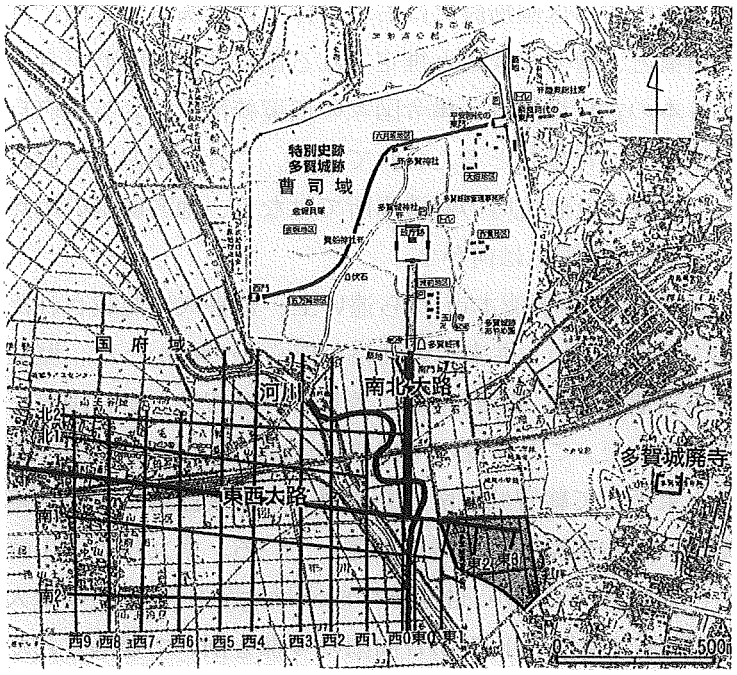
註２　小田富士雄編『日本城郭史研究叢書 10 北九州瀬戸内の古代山城』1983 年　名著出版

註３　木下良「「車路」考」『歴史地理研究と都市研究』1978 年　大明堂

註４　鶴嶋俊彦「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』7 号　1997 年　古代交通研究会



第１図　大宰府と水城・大野城・基肄城（石松好雄・桑原滋郎『大宰府と多賀城』56 図 1985 年 岩波書店）



第２図　多賀城跡の構成（註１の第 25 図に加筆）

第３図　鞠智城と肥後国内の車路・延喜式官道（150 万分１）
（『日本歴史地図（原始・古代編下）』木下良作製の第 19 図に加筆）

《発表③》

古代史からみた鞠智城

佐藤　信（東京大学大学院教授）

はじめに　　発掘調査成果と鞠智城の歴史的意義

１．白村江の敗戦（六六三年）と鞠智城

１．１古代東アジアの国際戦争

唐の朝鮮半島侵攻と東アジアの動乱…存亡の危機を迎えた諸国の中央集権化への動き

倭・百済復興勢力×唐・新羅

日・中・韓の国際的研究の課題

倭の王権と百済救援軍の派遣

大軍の派遣

斉明天皇・中大兄皇子・大海人皇子・中臣鎌足らの北九州への移動

難波から「御船西征」して吉備・伊予で軍勢動員しつつ北九州へ

倭軍の実態としての国造軍一広範囲の地方豪族軍　　唐軍は律令制軍団

肥後の地方豪族の参戦

○『日本書紀』天武十三年（六八四）十二月癸未条

大唐の学生土師宿禰甥・白猪史宝然、及び百済の役の時に大唐に没められたる者猪使連子首・筑紫三宅連得許、新羅に伝ひて至り。則ち新羅、大那末金物儒を遣して、甥等を筑紫に送る。

○『日本書紀』持統四年（六九〇）九月丁酉条・十月乙丑条

大唐の学問僧智宗・義徳・浄願、軍丁筑紫国の上陽咩郡の大伴部博麻、新羅の送使大那末金高訓等に従ひて、筑紫に還至れり。

軍丁筑紫国の上陽咩郡の人大伴部博麻に詔して曰はく、「天豊財重日足姫天皇（斉明）の七年（六六一）に、百済を救ふ役に、汝、唐の軍の為に虜にせられたり。天命開別天皇（天智）三年（六六四）に洎びて、土師連富杼・氷連老・筑紫君薩夜麻・弓削連元宝の児、四人、唐人の計る所を奏聞さむと思欲へども、衣粮無きに縁りて、達くこと能はざることを憂ふ。是に、博麻、土師富杼等に謂りて曰はく、『我、汝と共に、本朝に還向かむとすれども、衣粮無きに縁りて、倶に去くこと能はず。願ふ、我が身を売りて、衣食に充てよ』といふ。富杼等、博麻が計の依に、天朝に通くこと得たり。汝、独他界に淹滞ること、今に卅年なり。朕、厥の朝を尊び国を愛ひて、己を売りて忠を顕すことを嘉ぶ。故に務大肆、并て絁五匹・綿一十屯・布三十端・稲一千束・水田四町賜ふ。其の水田は曾孫に及至せ。三族の課役を免して、其の功を顕さむ」とのたまふ。

○『日本書紀』持統十年（六九六）四月戊戌条

追大弐を以て、伊予国の風速郡のひと物部薬と、肥後国の皮石郡のひと壬生諸石とに授けたまふ。并て人ごとに絁四匹・絲十絇・布廿端・鍬廿口・稲一千束・水田四町賜ふ。戸の調役復す。以て久しく唐の地に苦ぶることを慰ひたまふとなり。

○『続日本紀』慶雲四年（七〇七）五月癸亥条

讃岐国那賀郡錦部刀良、陸奥国信太郡生王五百足、筑後国山門郡許勢部形見等に、各衣一襲と塩・穀とを賜ふ。初め百済を救ひしとき、官軍利あらず。刀良ら、唐の兵の虜にせられ、没して官戸と作り、卌余年を歴て免されぬ。刀良、是に至りて我が使粟田朝臣真人らに遇ひて、随ひて帰朝す。その勤苦を憐みて、此の賜有り。

１．２白村江の敗戦後の防衛対策

古代朝鮮式山城…亡命百済貴族と築城技術

長門国…長門城。

筑紫国…大野城　基肄城（椽城）。　　大野城　　百間石垣、城門、水門

水城　　幅六〇メートルの水濠、版築工法、粗朶敷工法、掘立柱の埋め殺し工法

百済の都城公州・扶余を流れる大河錦江、旧都城漢城（ソウル）と漢江

烽のネットワーク

○『日本書紀』天智三年（六六四）是歳条

是歳、対馬島・壹岐島・筑紫国等に、防（さきもり）と烽（とぶひ）とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

○『日本書紀』天智四年（六六五）八月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

鞠智城の造営

○『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条

大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ。

○『続日本紀』文武三年（六九九）十二月甲申条

大宰府をして三野・稲積の二城を修らしむ。

三野城…筑前国那珂郡海部郷の美野駅か（吉田東伍『大日本地名辞書』）

稲積城…筑前国志麻郡志麻郷（糸島郡志摩町）稲留か（吉田東伍『大日本地名辞書』）

青木和夫説、同地「火山」（標高二四四メートル）

律令の烽制度

兵部省の長官「卿」の職掌―「烽火の事」（職員令 24 兵部省条）

大宰府の長官「帥」の職掌―「烽候」（職員令 69 大宰府条）

国司の長官「守」の職掌―「烽候」（職員令 70 大国条）

○軍防令 66 置烽条

凡そ烽置くことは、皆相ひ去らむこと四十里。若し山岡隔り絶えて、便に遂ひて安置すべきこと有らば、但し相ひ照し見ること得しめよ。必ず要ずしも四十里を限ら

ず。

○軍防令 67 烽昼夜条

凡そ烽は、昼夜時を分ちて候ひ望め。若し烽放つべくは、昼は烟を放ち、夜は火を放つ。其れ烟一刻尽し、火一炬尽すまでに、前烽応へずは、即ち脚力を差して、往りて前烽に告げよ。候失へる所由を問ひ知りて、速かに所在の官司に申せ。

○軍防令 68 有賊入境条

凡そ賊有りて境に入らむ、烽放つべくは、其れ賊衆の多少、烽の数の節級は、並に別式依れ。

○軍防令 69 烽長条

凡そ烽には長二人置け。三烽以下を検校せよ。唯し境越ゆること得ざらむ。国司、所部の人の家口重大にして、検校に堪へたらむ者を簡びて充てよ。若し無くは、通ひて散位、勲位を用ゐよ。分番して上下せよ。三年に一たび替へよ。交替の日に、新人を教へて通ひて解らしめよ。然うして後に相ひ代れ。其の烽修理すべくは、皆烽子を役せよ。公事に非ずよりは、輙く守る所を離るること得じ。

○軍防令 70 配烽子条

凡そ烽には、各烽子四人配てよ。若し丁無からむ処は、通ひて次丁を取れ。近きを以て遠きに及べ。均分して番に配てよ。次を以て上下せよ。

肥前国風土記・豊後国風土記の烽

有明海側にも烽の連絡網

○『肥前国風土記』七郡に計二十か所の烽

養父郡・神埼郡・小城郡に一所、松浦郡に八所、藤津郡に一所、彼杵郡に三所、高来郡に五所、

松浦郡…「褶振峰〔郡の東に在り。烽家。名を褶振烽と曰ふ。〕」

「値嘉郷〔郡の西南の海中に在り。烽家三所有り。〕」

○『豊後国風土記』四郡に計五カ所の烽

大野郡に一所、海部郡に二所、大分郡に一所、速見郡に一所

天平十二年（七四〇）藤原広嗣の乱の烽

○『続日本紀』天平十二年（七四〇）九月戊申条

間諜申して云はく、「広嗣は遠珂の郡家に軍営を造り、兵弩を儲く。而して烽火を挙げて国内の兵を徴り発せり」とまうす。

○『続日本紀』天平十二年（七四〇）十月壬戌条

逆賊広嗣謀りて云はく、「三道より往かむ。即ち広嗣自ら大隅・薩摩・筑前・豊後等の国の軍合せて五千人を率ゐて、鞍手道より往かむ。綱手は筑後・肥前等の国の軍合せて五千許人を率ゐて、豊後国より往け。多胡古麻呂、〔率ゐる軍の数を知らず〕田河道より往け。」といふ。

多胡古麻呂の軍が肥後の軍団ならば、定員四千人（弘仁四年〔八一三〕まで）

延暦十一年（七九二）六月　　律令軍団制の停廃（ただし、返要の陸奥・出羽・佐渡・大宰府管内諸国をのぞく）

延暦十八年（七九九）四月十三日太政官符（『類聚三代格』）

烽候の停廃（但し大宰府管内は旧のまま設置）

内外無事で防御の恐れなく、空しく民力を費やす烽燧の設は不要

２．鞠智城の立地

２．１　有明海と国際関係

有明海と国際関係

筑紫国造磐井と高句麗・百済・新羅・加耶との外交。

基盤としての筑紫国・火国・豊国

八女古墳群岩戸山古墳（福岡県八女市）と石人・石馬文化圏　　阿蘇石

火国古墳文化の展開

江田船山古墳（熊本県菊水町）出土鉄刀銘

ワカタケル大王（倭王武・雄略天皇）と火（肥後）の地方豪族

奉事　典曹人　書者張安

○熊本県江田船山古墳（熊本県菊水町）出土鉄刀銘（東京国立博物館）

台天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无利弖、八月中、用大鉄釜、并四尺廷刀、八十練□十振、三寸上好□刀。服此刀者、長壽、子孫洋々、得□恩也。不失其所統。作刀者名伊太□、書者張安也

肥君の展開

大伴氏による火葦北国造阿利斯登の半島派遣

火葦北国造阿利斯登の子日羅と百済・新羅

○『日本書紀』敏達十二年（五八三）七月朔条

詔して曰はく、「我が先考天皇（欽明）の世に属りて、新羅、内官家を滅せり。…先考天皇、任那を復てむことを謀りたまへり。果さずして崩りまして、其の志を成さずなりき。是を以て、朕、当に神しき謀を助け奉りて、任那を復興てむとおもふ。今百済に在る、火葦北国造阿利斯登が子達率日羅、賢しくして勇あり。故、朕、其の人と相計らむと欲ふ」とのたまふ。

○『日本書紀』敏達十二年（五八三）是歳条

日羅、…「檜前宮御寓天皇（宣化）の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使しし、火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子、臣、達率日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて来朝り」とまうす。」…是に日羅、桑市村より、難波の館に遷る。徳爾等、昼夜相計りて、殺さむとす。…遂に十二月の晦に、光失ふを候ひて殺しつ。日羅、更に蘇生りて曰はく、「此は是、我が駆使奴等せる所なり。新羅には非ず」といふ。…乃ち使を葦北に遣して、悉に日羅の眷属を召して、徳爾等を賜ひて、情の任

に決罪しむ。是の時に、葦北君等、受りて弥売嶋に投つ。…日羅を以て、葦北に移し葬る。…

筑前国嶋郡大領肥君猪手

○大宝二年（七〇二）筑前国嶋郡川辺里戸籍

肥君猪手…嶋郡大領（郡司）、「戸主追正八位上勲十等肥君猪手」

戸口一二四（不課一〇九…女四五・奴婢三七）

○天平八年（七三六）度薩摩国正税帳

出水郡　「大領外正六位下勲七等肥君」

薩摩郡　「主帳外少初位上勲十二等肥君広龍」

２．２　菊池川流域

菊池川流域古墳群

菊池川流域の生産地を背後から守る　　参考：鬼城山（岡山県総社市）

西海道の陸路との関係

対隼人政策との関係

○『続日本紀』大宝二年［七〇二］九月戊寅条

薩摩の隼人を討つ軍士に勲を授くること各差あり。

道君首名…筑後国司で肥後国司を兼任

○『続日本紀』和銅六年（七一三）八月辛丑・丁巳条

従五位下道公首名、新羅より至る。（遣新羅大使）

従五位下道君首名を筑後守。

○道君首名卒伝（『続日本紀』養老二年［七一八］四月乙亥条）

筑後守正五位下道君首名卒しぬ。首名少くして律令を治め、吏職に暁らかに習へり。和銅の末に出でて筑後守となり、肥後国を兼ね治めき。人に生業を勧めて制条を為り、耕営を教ふ。頃畝に菓菜を樹ゑ、下、鶏豚に及るまで、皆章程有りて曲さに事宜を尽せり。既にして時案行して、如し教へに遵はぬ者有らば随に勘当を加へり。始めは老少竊かに怨み罵れり。その実を収るるに及びて悦び服はぬこと莫し。一両年の間に、国中化けり。また、陂・池を興し築きて、灌漑を広む。肥後の味生池と、筑後の往々の陂・池とは皆是なり。是に由りて、人その利を蒙りて、今に温給するは皆、首名が力なり。故、吏の事を言ふ者は、咸く称の首とす。卒するに及びて百姓これを祠る。

３．鞠智城の造営・経営主体と機能

３．１鞠智城の造営・経営主体

古代朝鮮式山城

百済系技術

八角形建物　　韓国河南市の二聖山城の多角形建物・貯水池

石垣・城門・門礎石・水門・版築　　構造、技術、石材

倉庫群

烽の連絡網

陸上交通一西海道と鞠智城　　水上交通と鞠智城

貯水池・貯木場

百済系小金銅仏

大宰府…大宰府一一鞠智城司　　防人

肥後国…国司一軍団　　軍団兵士

菊池郡…所在郡

３．２鞠智城の機能

機能　　軍事・斥候・穀貯蔵・官司・実務官衙（政所）・厨

大宰府出土木簡と基肄城の穀

○大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随　大監正六位上田中朝[

４．鞠智城の発掘調査成果と古代史

構造…八角形望楼、城門、水門、石垣

造営技術と造営・経営主体

百済系小金銅仏

出土木簡

○鞠智城出土木簡

秦人忍□〔米カ〕五斗　　長一三四㎜×幅二五㎜×

その後の鞠智城

おわりに　　今後の課題…学術的検討の深化と発信

参考文献

佐藤信『古代の遺跡と文字資料』名著刊行会、１９９９年

白石太一郎監修、玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』雄山閣、２００２年

佐藤信『出土史料の古代史』東京大学出版会、２００２年

佐藤信『律令国家と天平文化』（日本の時代史４）吉川弘文館、２００２年

佐藤信『日本の古代』放送大学教育振興会、２００５年

鞠智城跡国史跡指定記念シンポジウム報告書『古代山城鞠智城を考える』温古創生館、２００５年

沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉『肥前国風土記・豊後国風土記』山川出版社、２００８年

《発表④》

朝鮮古代史からみた鞠智城－白村江の敗戦から南島と新羅海賊対策へ－

濱田　耕策（九州大学大学院教授）

○【発表の主旨】

①白村江の敗戦後に唐・新羅軍の侵入に備えて、大宰府の守備を中心とした防衛施設網を構成する一つの地点に「鞠智城」の地が選定されたのは、朝鮮半島西部から有明海にいたる文物渡来の歴史が前史としてあったか。（弥生時代・無文土器〔宇土城址遺跡等〕）・銅銭（菊池市長田の外園遺跡の弥生後期地層から貨泉が出土）－古墳時代・船山古墳の埋葬品・張安／火葦北国造（葦北郡・水俣市・八代市南部）阿利斯登の子の達率日羅（倭系百済官僚）583 年・敏達天皇代／八代市の球磨川の支流に百済来川／博多湾とともに有明海ルートの往来も考慮）

②大宰府の大野城と水城を中心とした防御網の構成には鞠智城も含まれるが、この構想には百済官人が熊津城や扶餘城を守備する百済の山城防御網をモデルとしたのであろう。

③「鞠智」（古訓の〔くくち〕は「鞠智」の百済語音（KukChi）に由来するか。さらに、大野城等の築城を主導した「達率四比福夫」等の例から、「鞠智」とは百済王都の官人（達率クラス・官位１６位のなかの２位）の名か。

④築城時には対外的危機に備えた施設であったが、危機の緩和のもとで、律令制国家の地方統治を担う施設（南島勢力の慰撫等）の機能が備わり、９世紀では「城院」として現れ、名称も「鞠」の「旁（つくり）」と漢音「KiKu」から「菊」へ、「智」も同音の「池」へ変わり、「菊池」（KiKuChi）と好字をもって和語化したのであろう。

⑤８世紀を経て、９世紀後半以降に西海上に再び対外的危機（新羅（凶賊）海賊の出没）が発生すると、菊池城院も大宰府のもとでこの危機に対応することになる。

⑥鞠智城の発掘調査とその報告書は朝鮮式山城研究として先駆的であり有益である。今日、城内外を一望できるが、韓国の古代山城では王城に隣接する山城の発掘調査は行われているものの、多くは立地条件の厳しさもあって、未調査か表面調査に止まることを考えると、鞠智城に現れた朝鮮式山城の各要素は韓国における今後の山城研究に有益であろう。

○【百済の歴史区分と時代的特徴】（『三国史記』百済 BC18？～AD660・663 年／高句麗 BC37？～AD668／新羅 BC57？～AD935）

①**慰禮城（漢城）時代**（BC18？～AD475／初代・温祚王～21 代・蓋鹵王）・『三国志』魏書・韓伝（馬韓・伯盧国）・七支刀（364 年・百済の久氐、卓淳国に倭国との通交を求む／372 年・南朝との交渉のもとでの倭王権との交渉路線が始まる・４世紀末の 17 代・阿華王代に高句麗広開土王に屈して、倭から離反するも、すぐ修復・438 年、倭王珍、六国諸軍事安東大将軍倭国王を自称。451 年、宋、倭王済を六国諸軍事安東将軍倭国王と冊封）

②**熊津（久麻那利・公州）時代**（AD475～AD538／22 代・文周王～26 代・聖王〈在位は 523～553 年〉）・475 年、高句麗に圧されて南遷・477 年、倭の武王、七国諸軍事安東大将軍倭国王を自称。478 年、宋、武王を六国諸軍事安東大将軍倭王と冊封。（東城王と武寧王は即位前には倭国に入質）25 代武寧王（461～〈501〉～523）南朝と倭王権との連携の強化と固定。521 年、梁から使持節都督百済諸軍事寧東大将軍百済王と冊封／高句麗・新羅との対立激化・半島西南部へ進出（512 年 12 月、百済

は四県を編入←→**513 年 6 月、百済、五経博士段楊爾送る＝文化外交による倭済関係の質の変化の始まり＝武寧王代の意義**）・527~528 年、筑紫国造磐井、近江毛野率いる６万の兵を遮る。（529 年に新羅が「任那四村」を占領したことから推せば、毛野の軍は百済支援の軍であったと見られる。532 年、金官国、新羅に降る）・(534・541 年、百済は頻りに梁に使者を送り涅槃等の経義、毛詩博士、工匠、画師等を求めてこれを得ていた）538 年、聖王、倭国に仏像、経論を贈る（仏教の伝来〔『上宮聖徳法王帝説』〕／552 年、聖王、釈迦仏・幡蓋・経論を贈る〔『日本書紀〕／聖王の積極的な文化外交）

③扶餘（泗沘＝所夫里＝ソウル）時代（国号は南扶餘／扶餘は統一新羅時代より）（AD538～AD663/668／26 代・聖王〈『日本書紀』では聖明王〉～31 代・義慈王・年号を遂に使用せず）・**「ソウル」と国号の「南扶餘」の意味するものは何か。**『隋書』の”其の都、居抜城”とは”大きな都邑”＝”みやこ”の意・**聖王の治績＝百済国の再興の意志を表現**・半島西南部の獲得・新羅との対立の激化（552 年、新羅は百済の漢城・平壌を奪う）・553 年、倭国は百済に医・易・暦博士を求め、翌年に五経・易・暦・医博士を受ける。（562 年、加耶、新羅に叛して降伏す〔「日本書紀」「三国史記」〕）・これより倭国と新羅の交渉が盛んとなる。・27 代の**威徳王〔554～598 年〕の文化外交**（577 年、経論・律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工を倭国に送る。588 年、威徳王、僧・仏舎利・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を倭国に送る。595 年、百済僧の慧聡の渡来・602 年(30 代武王〔600～640 年〕3 年)、百済僧観勒、暦本・天文地理書・遁甲方術書を伝える。（610 年、高句麗僧曇徴、彩色・紙・墨・碾磑〔みずうす〕の製法を伝える）・660 年、唐・新羅軍に百済の王城陥落（金庾信と階伯）・661 年、倭国、王子豊璋に兵 5000 余をつけて、百済に送還。・663 年 8 月 27～28 日白村江の敗戦、9 月 7 日、百済の州柔城降伏し、復興戦終結。

○【鞠智城の200年】①～⑤は「鞠智城」に直接関係する史料、他は参考史料）

【史料】Ａ群〔白村江の敗戦後の対応〕（朝鮮式山城の性格）

【参考①】『日本書紀』巻第２７天智天皇３年（６６４）

「是歳。於対馬島・壱岐島・筑紫国等、置防與烽。又於筑紫、築大堤貯水。名曰水城」（是の歳。対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防〔さきもり〕と烽〔すすみ／のろし〕をおいた。また筑紫に大堤を築いて水を貯えさせた。名づけて水城と言う）

【参考②】『日本書紀』巻第２７・天智天皇４年（６６５）

「秋八月。遣達率答炑春初、築城於長門国。遣達率憶禮福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。耽羅遣使来朝」（だつそちたふほんしゅんそを遣わして、城を長門国に築かせた。だちそちおくらいふくる・だつそちしひふくぶを筑紫国に遣わして、大野と椽〔き〕の二城を築かせた）

【参考③】『日本書紀』巻第２７・天智天皇６年（６６７）

「十一月‥‥是月、築倭国高安城・讃吉国山田郡屋島城・対馬国金田城」（是の月に、倭国高安城〔やまとのくにのたかやすのき・奈良県生駒郡と大阪府八尾市の境〕・讃吉国山田郡屋島城〔やしまのき・香川県高松市〕・対馬国金田城〔かねたのき・対馬市美津島〕を築いた）

〔新羅・唐戦争は６７５年に終結、朝鮮半島の安定化。南島への慰撫策が進むとこれにも

対応することになる〕

【参考④】『続日本紀』巻第１文武天皇２年（６９８）

「夏四月壬寅（１３日）遣務広弐文忌寸博士等八人于**南嶋覓国**。因給戎器」（務広弐〔正7位下に相当〕文忌寸博士〔むこうにのふみのいみきはかせ〕等八人を南嶋に遣わして国をもとめさせた。そこで戎器を給った）

①『続日本紀』巻第１・文武天皇２年（６９８）

「五月甲申（２５日）令大宰府繕治大野基肄鞠智三城」（大宰府に大野・基肄〔きい〕・鞠智〔くくち〕の三城を繕治させた）【この記事から「①鞠智城は３３年前に築いた大野・椽（基肄）城と連携する山城②鞠智城の築城はこの２城と同時期のことと考えられる。③古訓の（くくち／KukChi）は百済語音に由来し、築城を主導した人物名か、と推測される。④ここに至って、奄美等の南島勢力を慰撫する策にも対応する」ことが読みとれる。】【大宰府を中心とした山城や畿内に至る官道沿いの山城は新羅使ほかの来朝者には律令国家の威容を表現するか。遣新羅使は萬里山を遠望しつつ関門城をくぐって新羅の王京に入り、在京中には王京を取り囲む西兄山城、南山城、明活城等の山城を遠望したであろう】

【参考⑤】『続日本紀』巻第１・文武天皇３年（６９９）

「秋七月辛未（１９日）、**多禰・夜久・菴美・度感等人、従朝宰而来貢方物。授位賜物各有差。其度感嶋通中国、於是始矣**」（たね・やく・あまみ・とく〔徳之島〕等人、朝宰に従って方物を貢いだ。そこで位を授け、物を賜わった。その度感嶋が中国〔ここでは日本のこと〕に通うことはこれより始まる）

【参考⑥】**「九月丙寅（１５日）、修理高安城」**（高安城を修理した）「十一月甲寅(４日)文忌寸博士・刑部真木等自南嶋至。進位各有差」（ふみのいみきはかせ・おさかべのまき等が南嶋よりもどってきた。位を進めたがそれぞれに差があった）

【参考⑦】**「十二月甲申（４日）、令大宰府修三野・稲積二城」**（三野〔福岡市博多区住吉付近か〕・稲積〔福岡県糸島郡志摩町稲富〕の二城を修理させた）

【参考⑧】『続日本紀』巻第１・文武天皇４年（７００）

「**六月庚辰（３日）、薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君県、助督衣君弖自美、又肝衝難波、従肥人等、持兵剽却覓国使刑部真木等。於是勅竺志惣領、准犯決罰**」（さつまのひめ・くめ・はつ、えのこほりのかみえのきみあがた、すけえのきみてじみ、また、きもつきのなには、肥人〔くまびと〕等を従え、兵を持って覓国使〔くにまぎのさかい〕おさかべのまき等をおびやかす。是に、つくしの惣領に勅して、犯に准じて決罰させた）

【参考⑨】『続日本紀』巻第８・元正天皇養老３年（７１９）

「十二月戊戌（１５日）、停備後国安那郡茨城、葦田郡常城」（備後国安那〔やすな〕郡〔広島県深安郡神辺町と福山市北部〕茨城〔うまらのき〕、葦田郡常城〔あしだぐんとこのき・広島県芦品郡新市町の火呑山〕とをとどめた）

【史料】Ｂ群〔寧海軍使の張保皐の死(841 年 11 月)・清海鎮の廃止（851 年 2 月）後の新羅海賊の出没激化への対応〕

②『日本文徳天皇実録』巻１０・文徳天皇

「天安二年（８５８）閏二月丙辰（２４日）肥後国言。菊池城院兵庫自鳴〇丁巳（２５日）又鳴」（鞠智〔くくち／Kukchi〕城から菊池〔きくち／Kikuchi〕へ和語化）

③『日本文徳天皇実録』巻１０・文徳天皇

「天安二年（８５８）六月己酉（２０日）大宰府言。去五月一日。大風暴雨。官舎悉破。青苗朽失。九国二嶋盡被損傷。又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火」

【参考⑩】『日本紀略』前篇１７・清和天皇

「貞観元年（８５９）正月二十一日己卯。大宰府言。筑前国志摩郡兵庫鼓自鳴。庫中弓矢有声聞外」

【参考⑪】『日本三代実録』巻２７・清和天皇

「貞和十五年（８７３）五月二十七日庚寅。先是。大宰府言。去三月十一日。**不知何許人。舶二艘載六十人。漂着薩摩国甑嶋郡。**言語難通。問答何用。其首崔宗佐。大陳潤等自書曰。宗佐等。渤海国人。彼国王差入大唐。賀平徐州。海路浪険。漂盪至此。国司推験事意。不賚公験。所書年紀。亦復相違。疑是新羅人。偽称渤海人。来竊窺邊境歟。領将二舶。向府之間。一舶得風。飛帆逃遁。是日。　勅。渤海遠蕃歸順於我。新羅蕞爾久挾禍心。宜令府国官司。審加推勘。實是渤海人者。須加慰労。充粮發歸。**若新羅凶黨者。全禁其身言上。兼令管内諸国。重慎警守**」

④『日本三代実録』巻２７・清和天皇

「**貞観十七年（８７５）六月二十日辛未。大宰府言。大鳥二集肥後国玉名郡倉上。向西鳴。群鳥数百。噬抜菊池郡倉舎葦草**」

【参考⑫】『日本三代実録』巻３４・陽成天皇

「**元慶元年（８７８）十二月十一日。是日。大宰少貳従五位下嶋田朝臣忠臣等奏言。橿日宮有詫宣云。新羅虜船欲向我国。宜為之備。**因茲遣従五位上守刑部大輔弘道王。向伊勢太神宮。祈請冥助。二十四日乙酉。遣兵部少輔従五位下兼行伊勢権介平朝臣季長。向大宰府。奉幣橿日。八幡及姫神。住吉。宗形等大神。其橿日。八幡。姫神。別奉綾羅御衣各一襲。金銀装寶剱各一。**以彼府奏有詫宣云。新羅凶賊欲窺我隙。肥後国有大鳥集。河水變赤等之恠也**」

⑤『日本三代実録』巻３５・陽成天皇

「元慶三年（８７９）三月十三日癸卯。丹後国言。異国船一艘。長六丈。広一丈五尺。漂着管竹野郡。皆悉破損。無有調度〇十六日丙午。豊前国八幡大菩薩宮前殿東一神功皇后御前瓰。無故破裂。成九十片。破裂之時其鳴如犢細聲・**又肥後国菊池郡城院兵庫自鳴**」

【参考⑬】『日本紀略』前篇２０・宇多天皇

「寛平五年（８９３）閏五月三日庚午。大宰飛駅使来偁。**新羅賊於肥後国飽田郡。焼七人宅。**又於肥前国松浦郡逃去。□賜勅符。令追討之〇六月二十日丙辰。大宰飛駅使来。奏新羅賊事。給勅符遣之」

【参考文献】

①遠山美都男『白村江－古代東アジア大戦の謎－』（講談社現代新書、1997 年 10 月）
②森　公章『「白村江」以後－国家危機と東アジア外交－』（講談社選書、1998 年 6 月）
③小田富士雄「朝鮮式山城と神護石」（『ゼミナール日本古代史下』光文社、1980 年 1 月）
④大田幸博「肥後・鞠智城」（『古代文化』第 47 巻第 11 号、1995 年 11 月）
⑤高 正 龍「韓国古代山城」（『古代文化』第 47 巻第 12 号、1995 年 12 月）
⑥濱田耕策「第四章　王権と海上勢力－特に張保皐の清海鎮と海賊に関連して－」（『新羅国史の研究－東アジア史の視点から－』吉川弘文館、2002 年 2 月）

《パネルディスカッション》

古代山城 鞠智城を考える

―国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題―

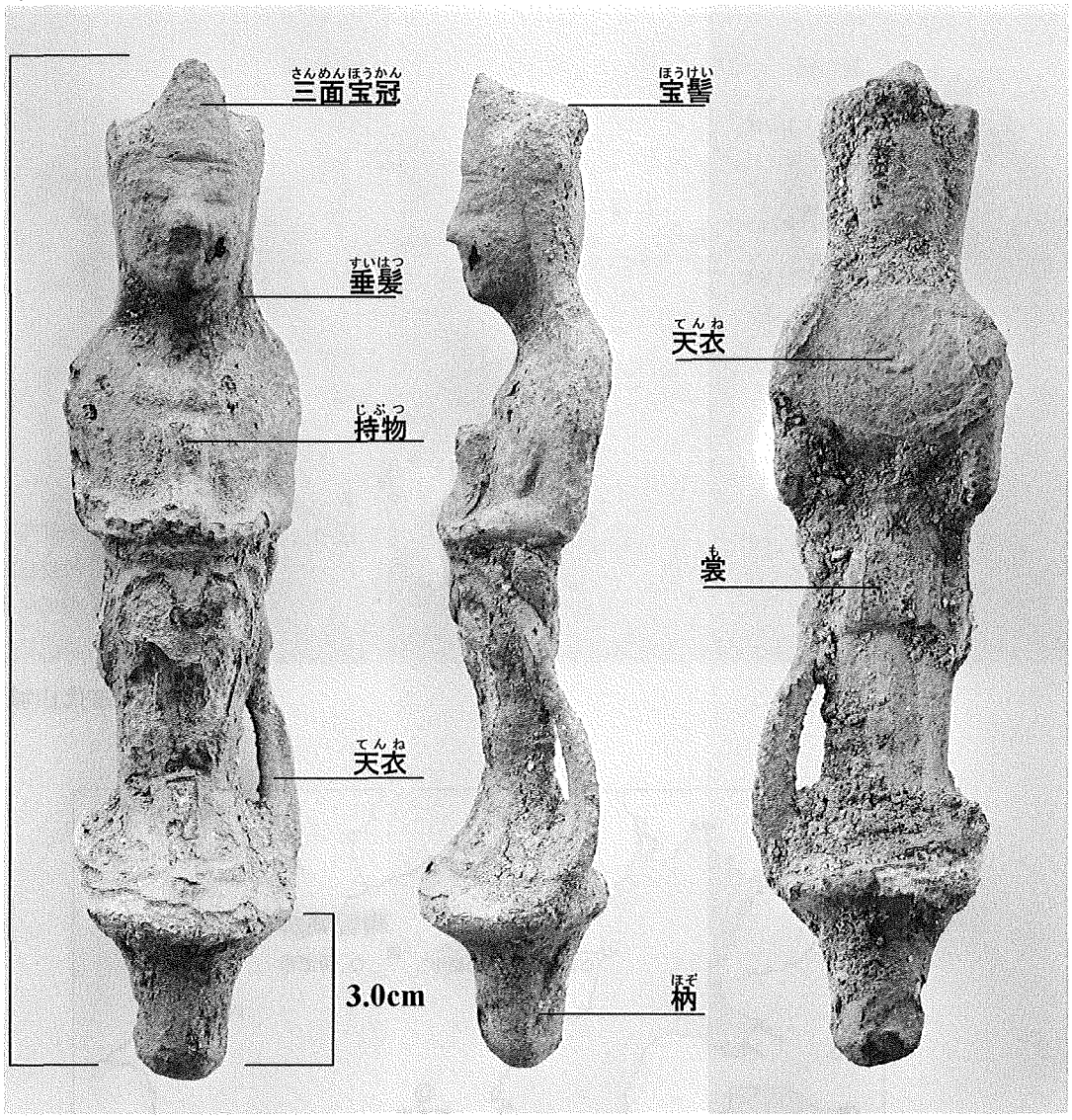
〔コーディネーター〕大田幸博
〔パネラー〕岡田茂弘氏・佐藤　信氏・濱田耕策氏

1　鞠智城の築城時期と立地

2　古代山城における鞠智城の歴史的意義

3　今後の課題

1．鞠智城跡出土 銅造菩薩立像



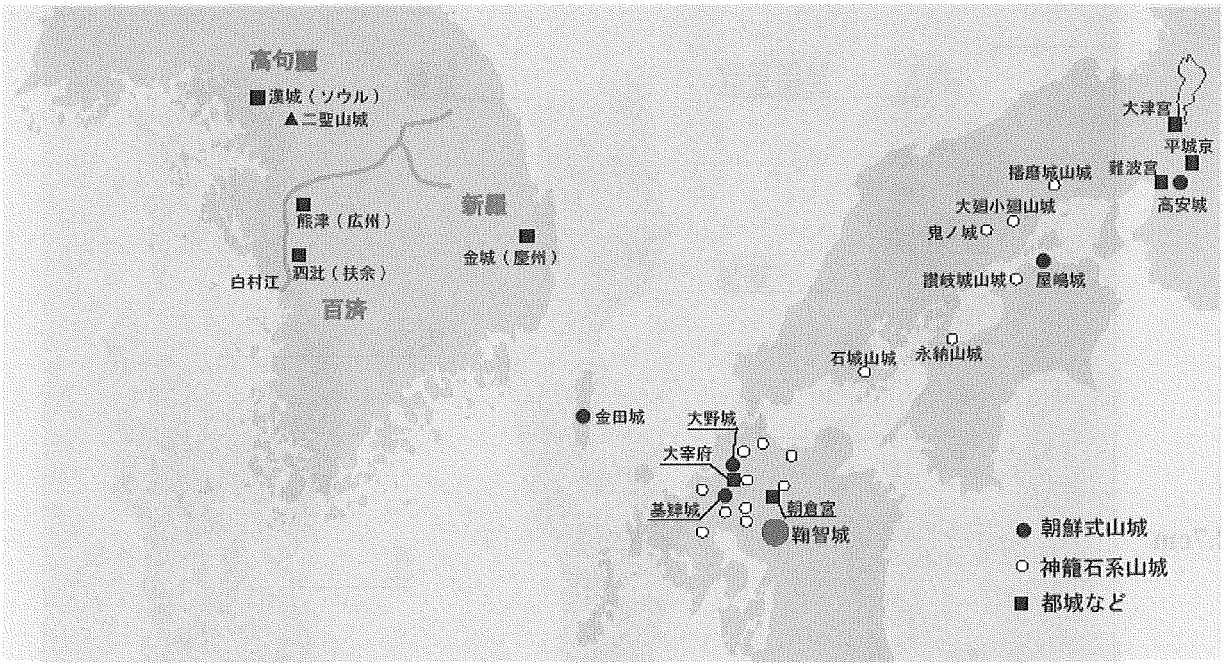
（正面）　（側面）　（背面）

銅造菩薩立像

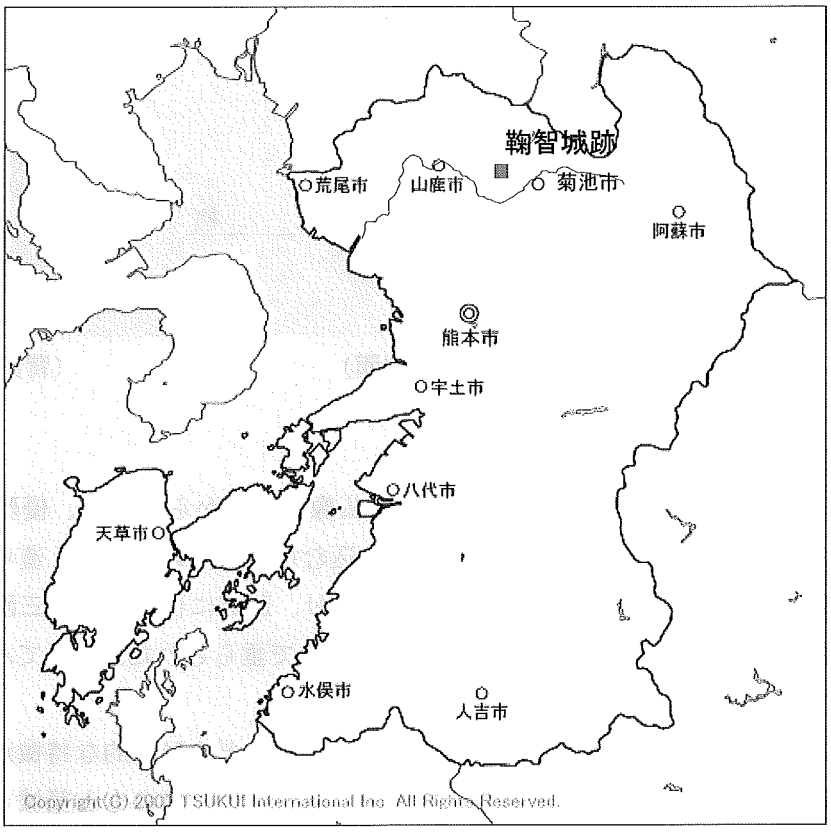
全高12.7cm（像高9.7cm）、幅3.0cmの小型の仏像で、横から見ると、優雅なＳ字曲線を描いています。下部の枘（ほぞ）は台座に差し込むためのもので、太く造り出しているのが特徴です。丸みを帯びた穏やかな表情をしており、頭部に付けられた三面宝冠、肩まで垂らした垂髪（すいはつ）、両肩にかけられ、足下まで垂らされた天衣（てんね）などがよく表現されています。

両手を腹部で合わせ、持物（じぶつ）を捧持する姿などの形態的な特徴から、７世紀後半の百済系菩薩立像と考えられており、百済の亡命貴族の指導のもと築城したとする『日本書紀』の記述との関連が指摘できます。

2．鞠智城跡の位置と立地

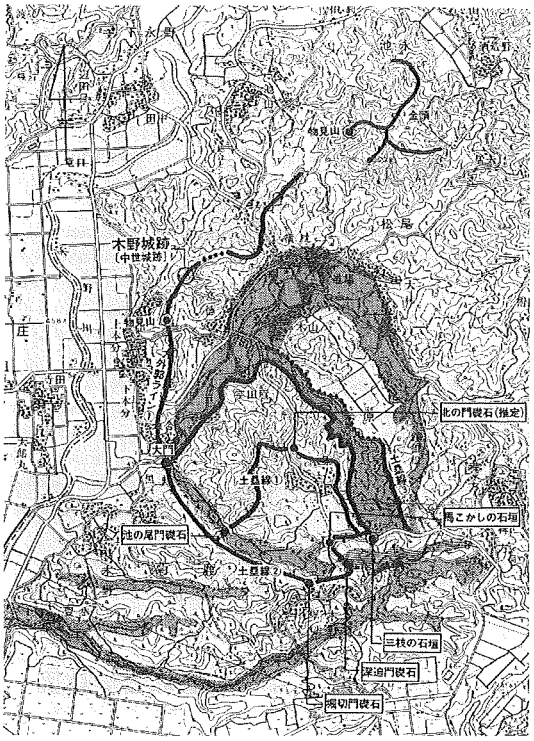


古代山城分布図



鞠智城跡位置図

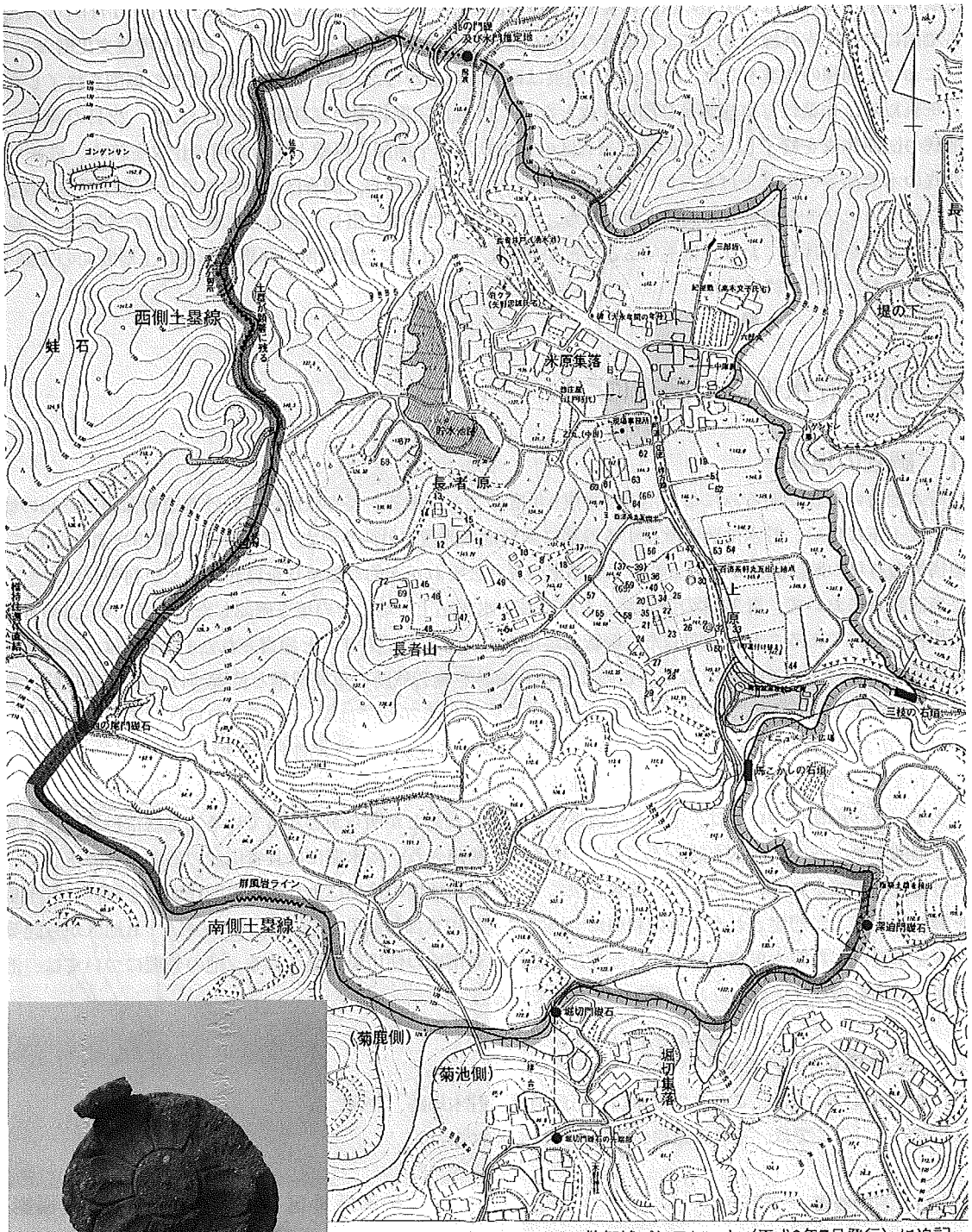
鞠智城跡全景（平成19年度撮影）



鞠智城跡周辺図

長者原地区完掘状況（平成9年度撮影）

3．鞠智城跡の遺構

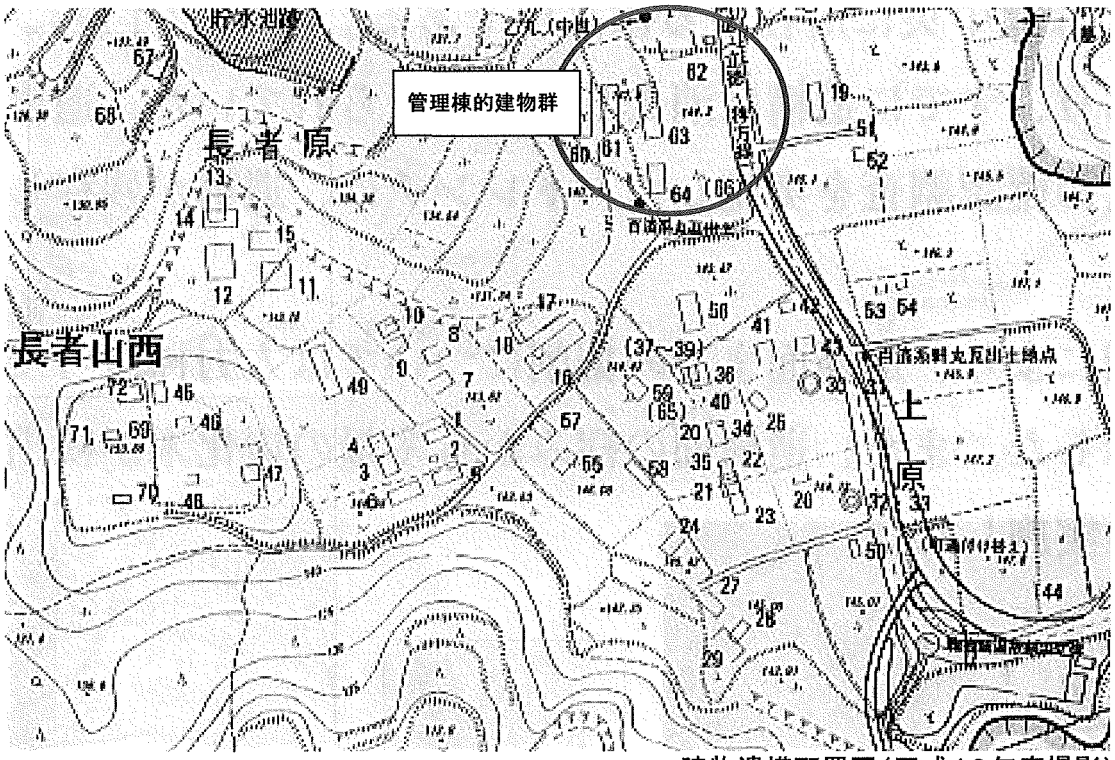


鞠智城跡全体図

単弁八葉蓮華文軒丸瓦　瓦当

64号建物跡周溝出土

A．建物遺構

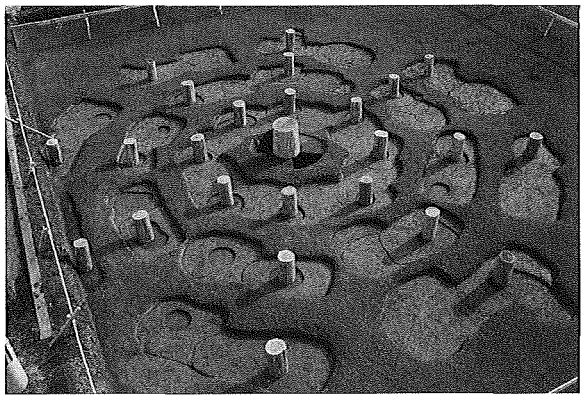


建物遺構配置図（平成19年度撮影）

49号礎石建物跡（宮野礎石）

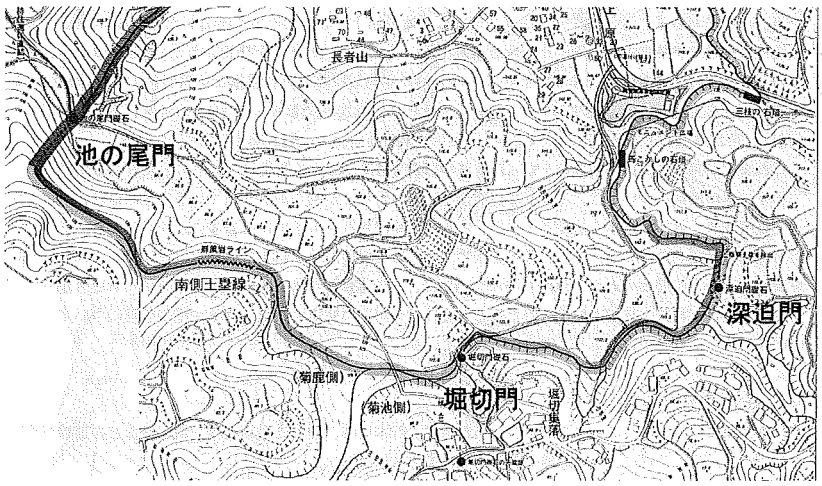
60号掘立柱建物跡（北から）

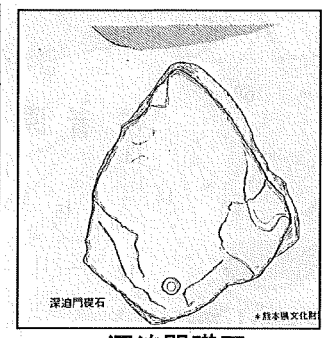
56号礎石建物跡（北から）



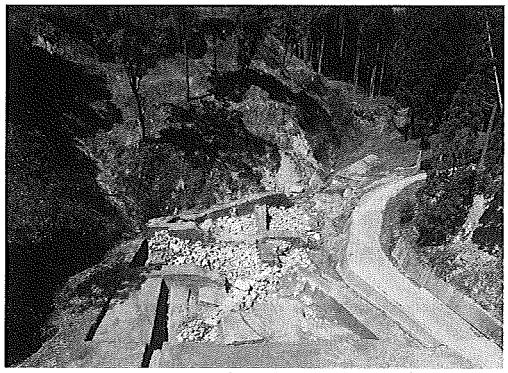
八角形建物跡（北から）

B．城門跡

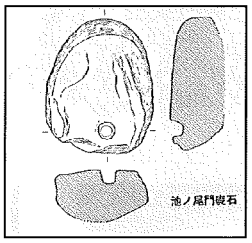




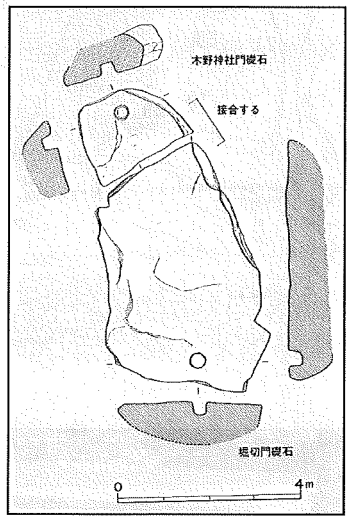
深迫門礎石



池の尾門・全景（南東から）

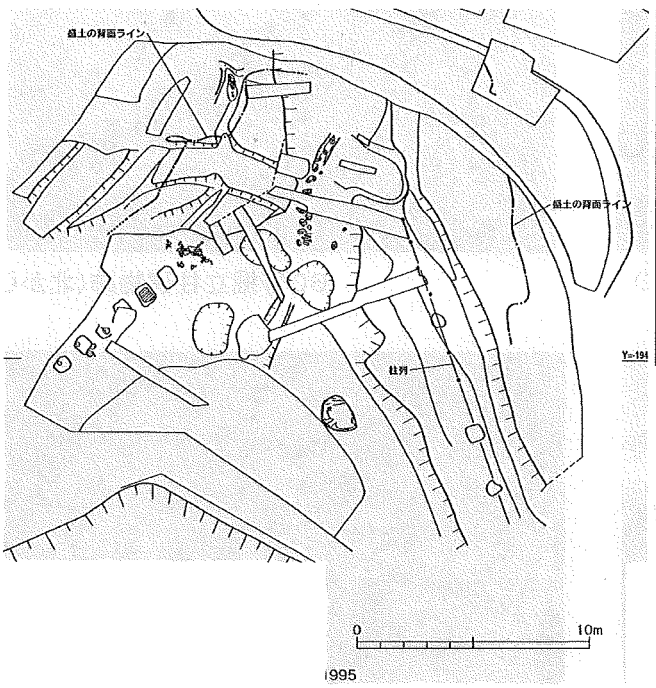


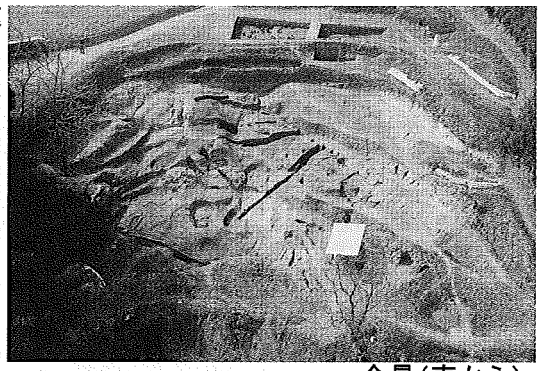
池の尾門礎石



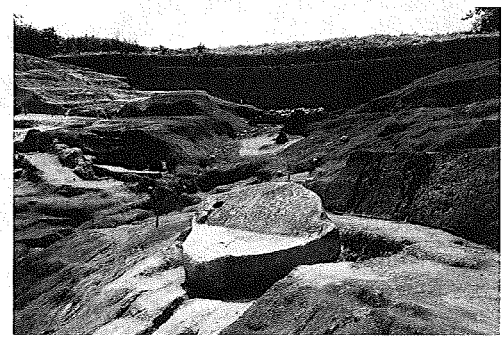
堀切門礎石

① 深迫門



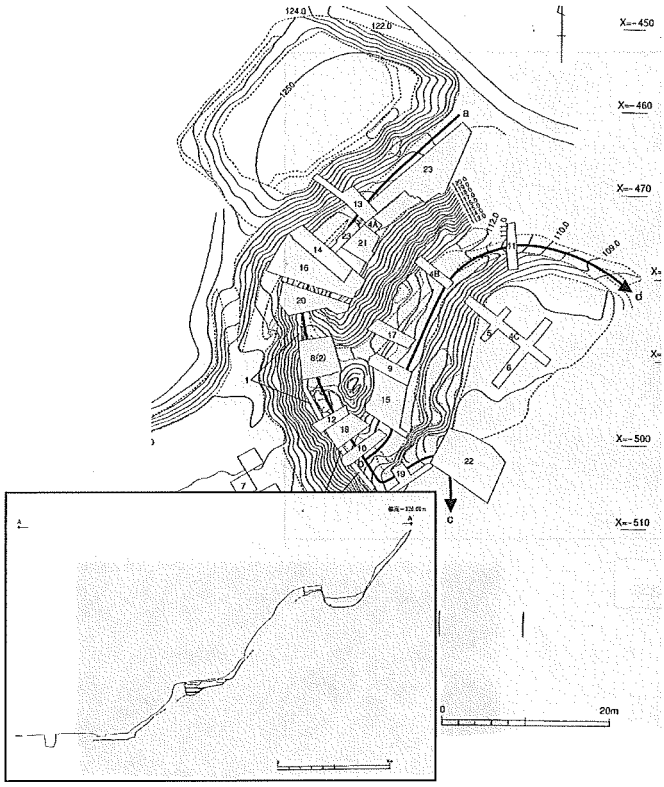


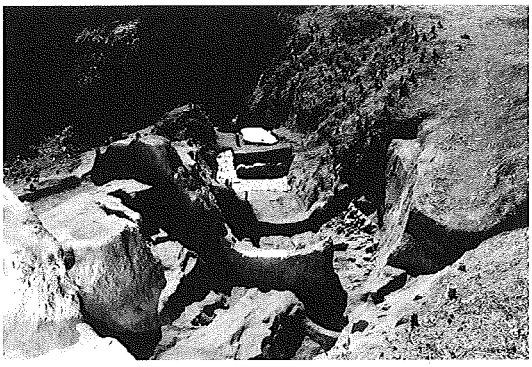
全景（東から）



深迫門礎石（東から）

② 堀切門

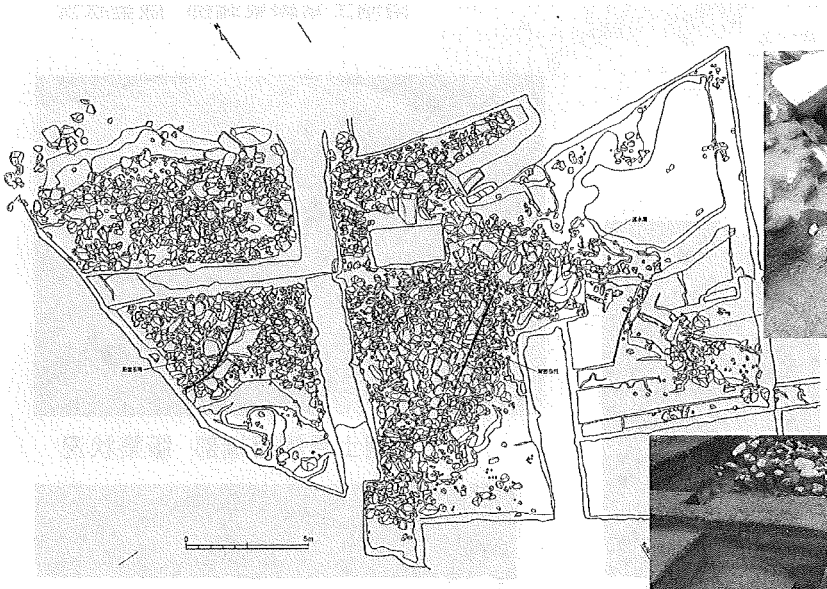




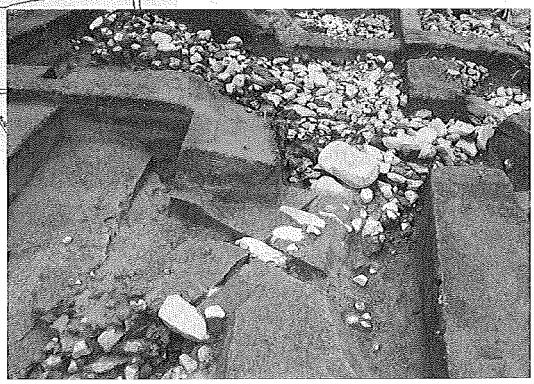
堀切門・通路（北西から）

堀切門・道路跡（北から）

③ 池の尾門



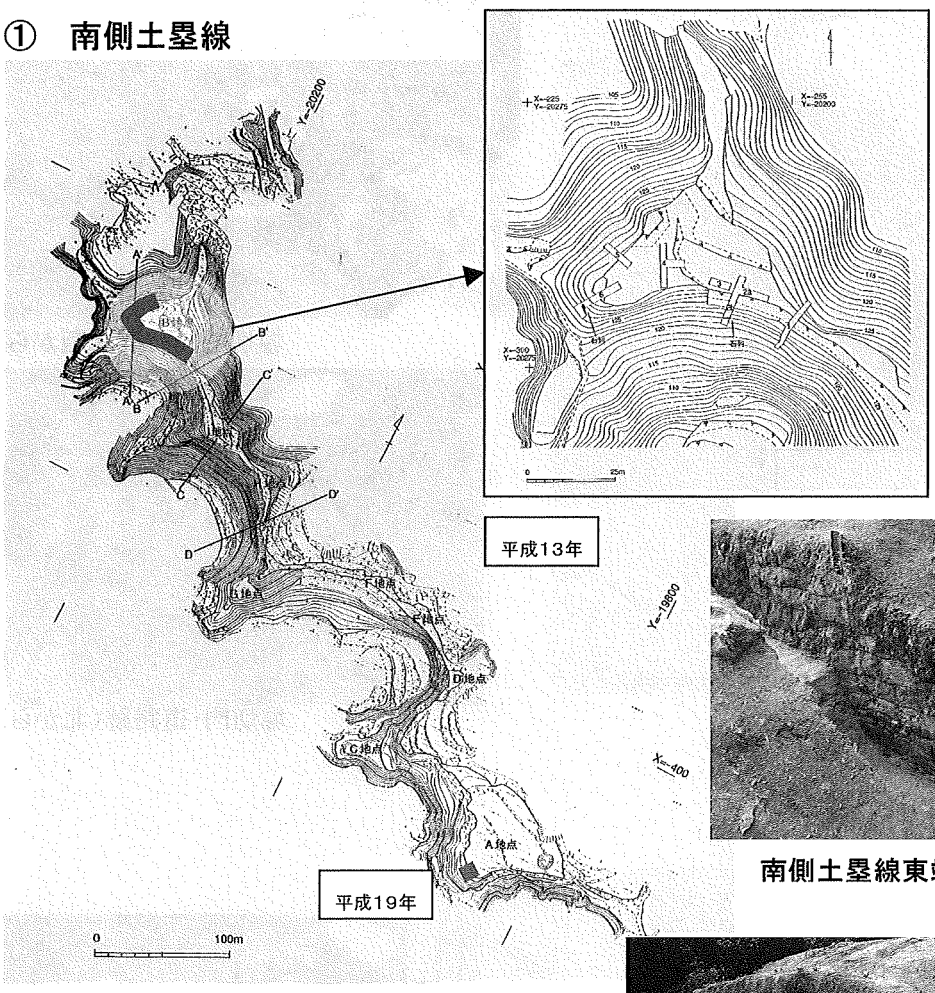
池の尾門跡・取水口と導水溝



池の尾門跡・通水溝（西から）

C．土塁遺構

① 南側土塁線



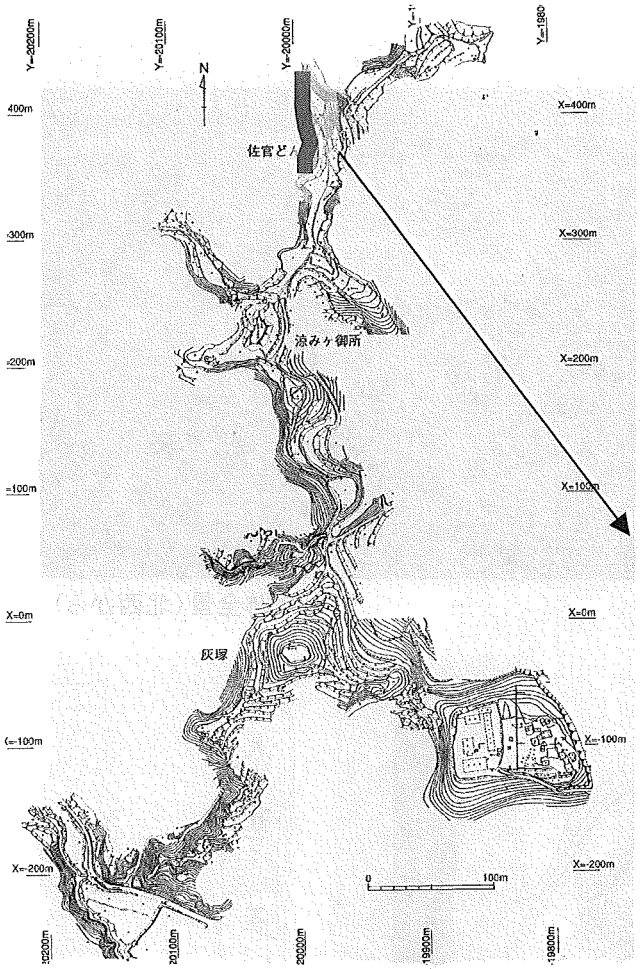
南側土塁線東端部　版築状況

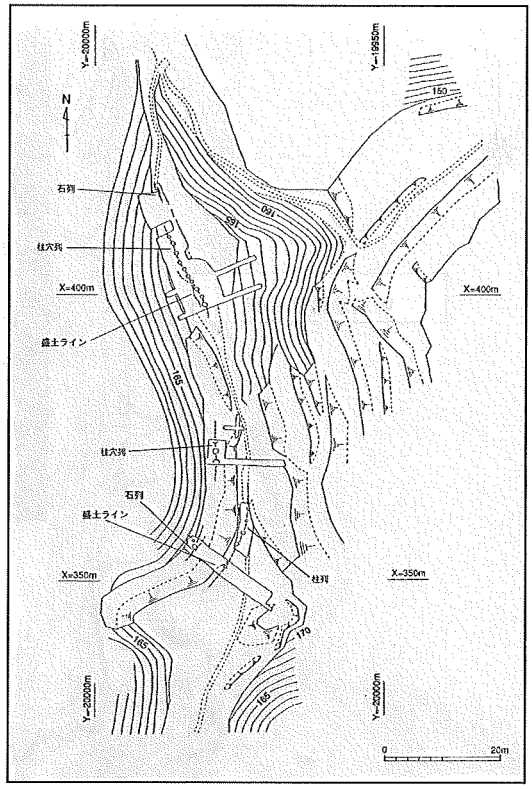
南側土塁線西端部　版築状況

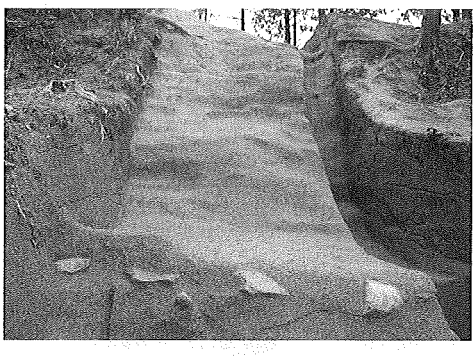
南側土塁線西端部（東から）

南側土塁線西端部　土塁裾部石列

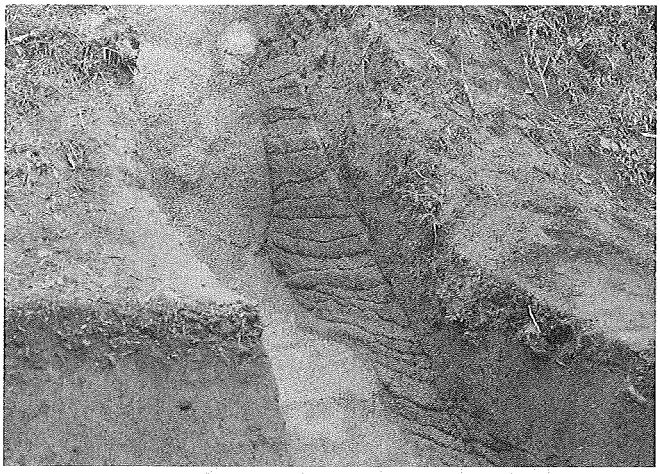
② 西側土塁線







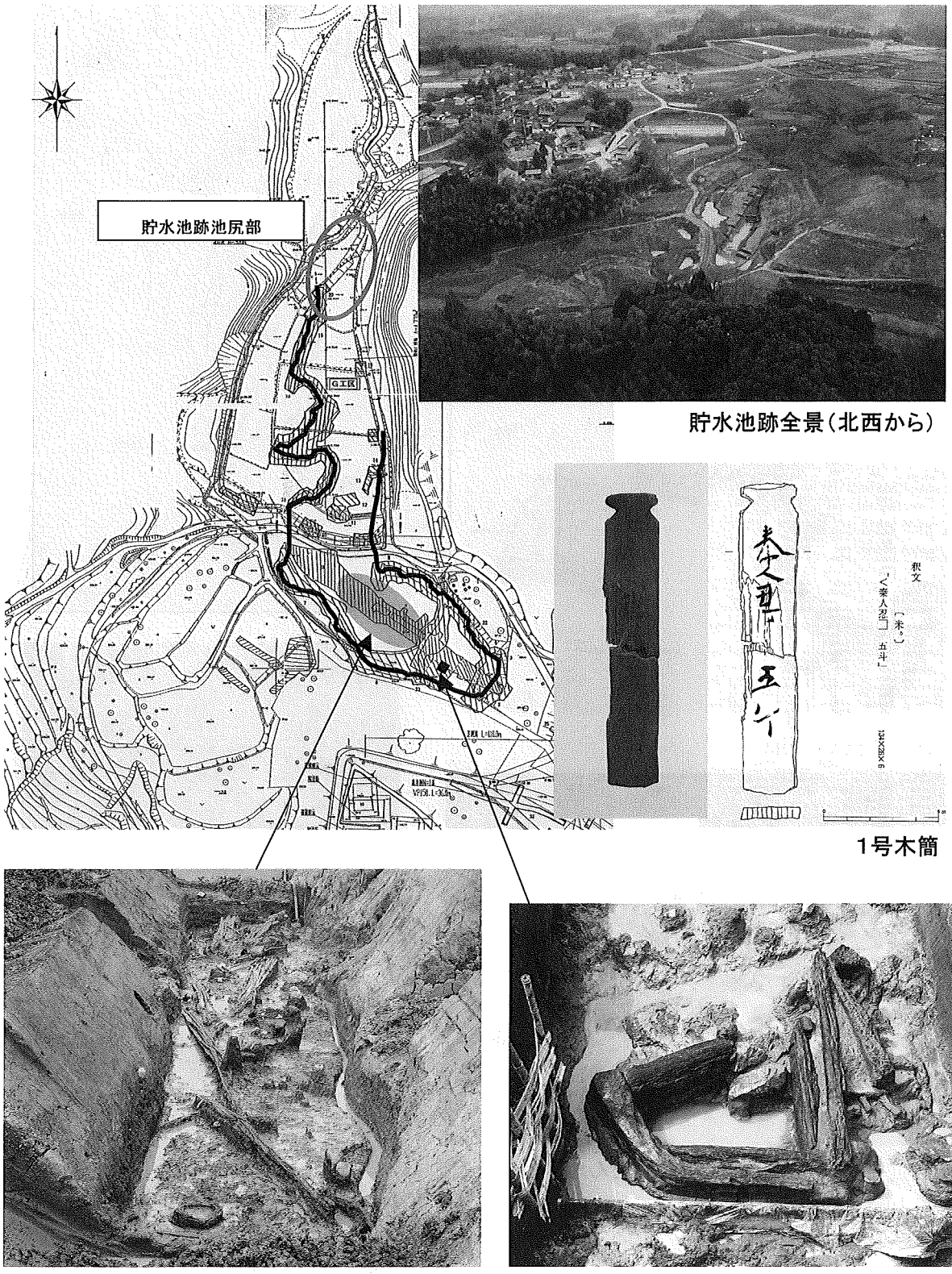
西側土塁線佐官どん地区　盛土と石列



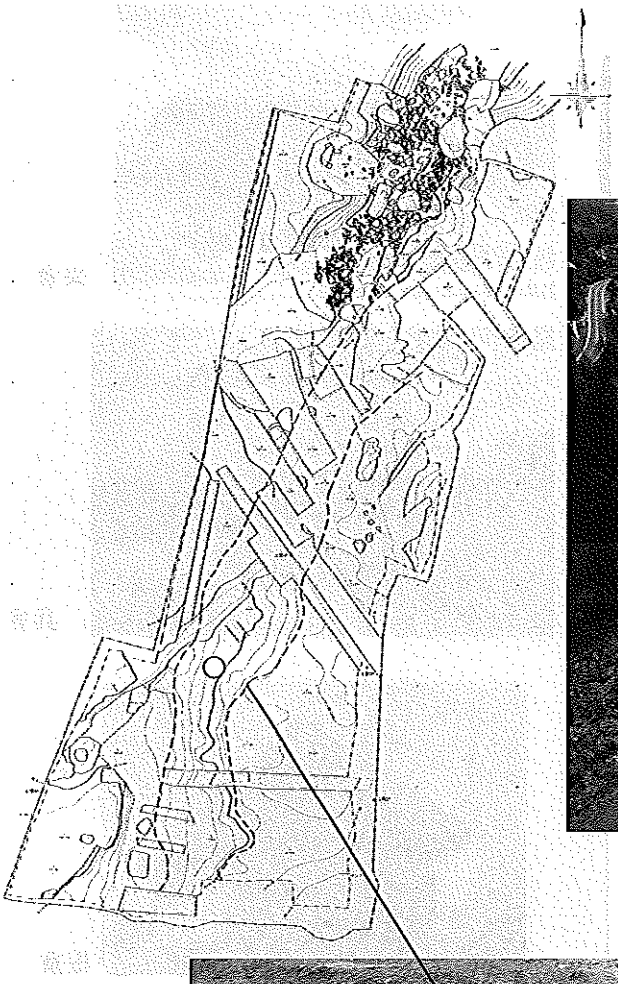
西側土塁線佐官どん地区版築状況

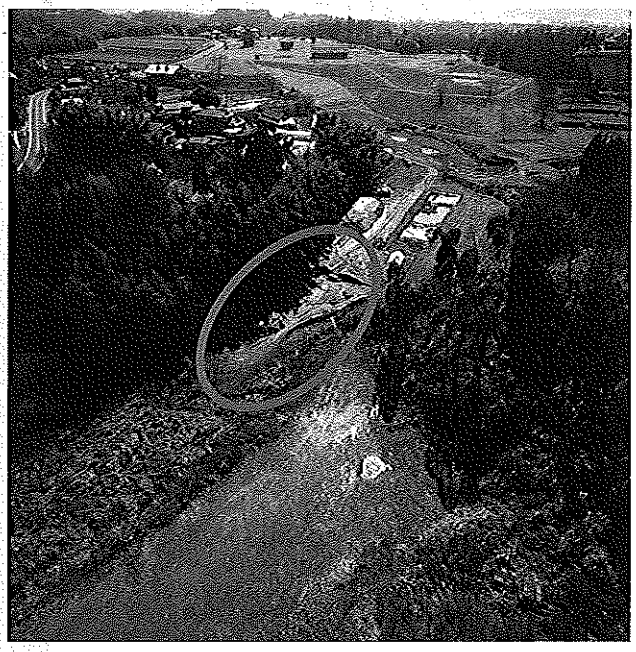
西側土塁線佐官どん地区　前面柱列

D．貯水池跡



〔貯水池跡池尻部〕

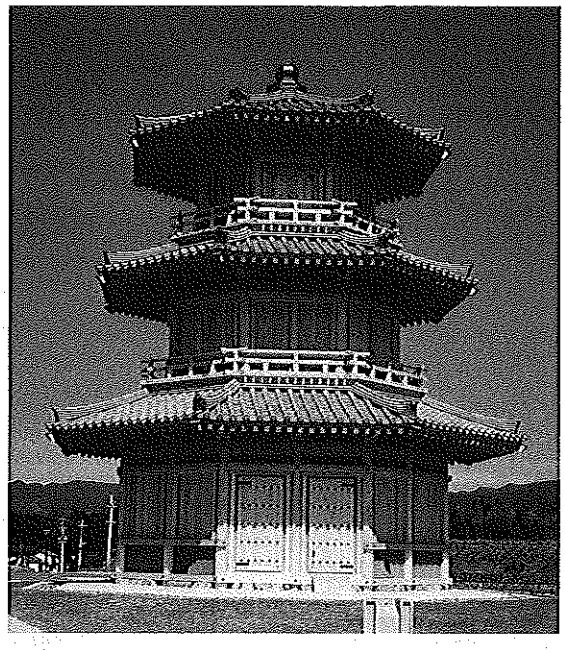




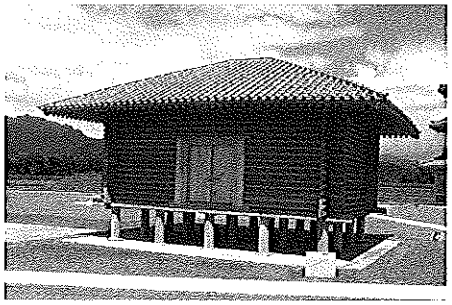
貯水池跡池尻部（北西から）

銅造菩薩立像出土状況（北西から）

4．整備状況



八角形鼓楼



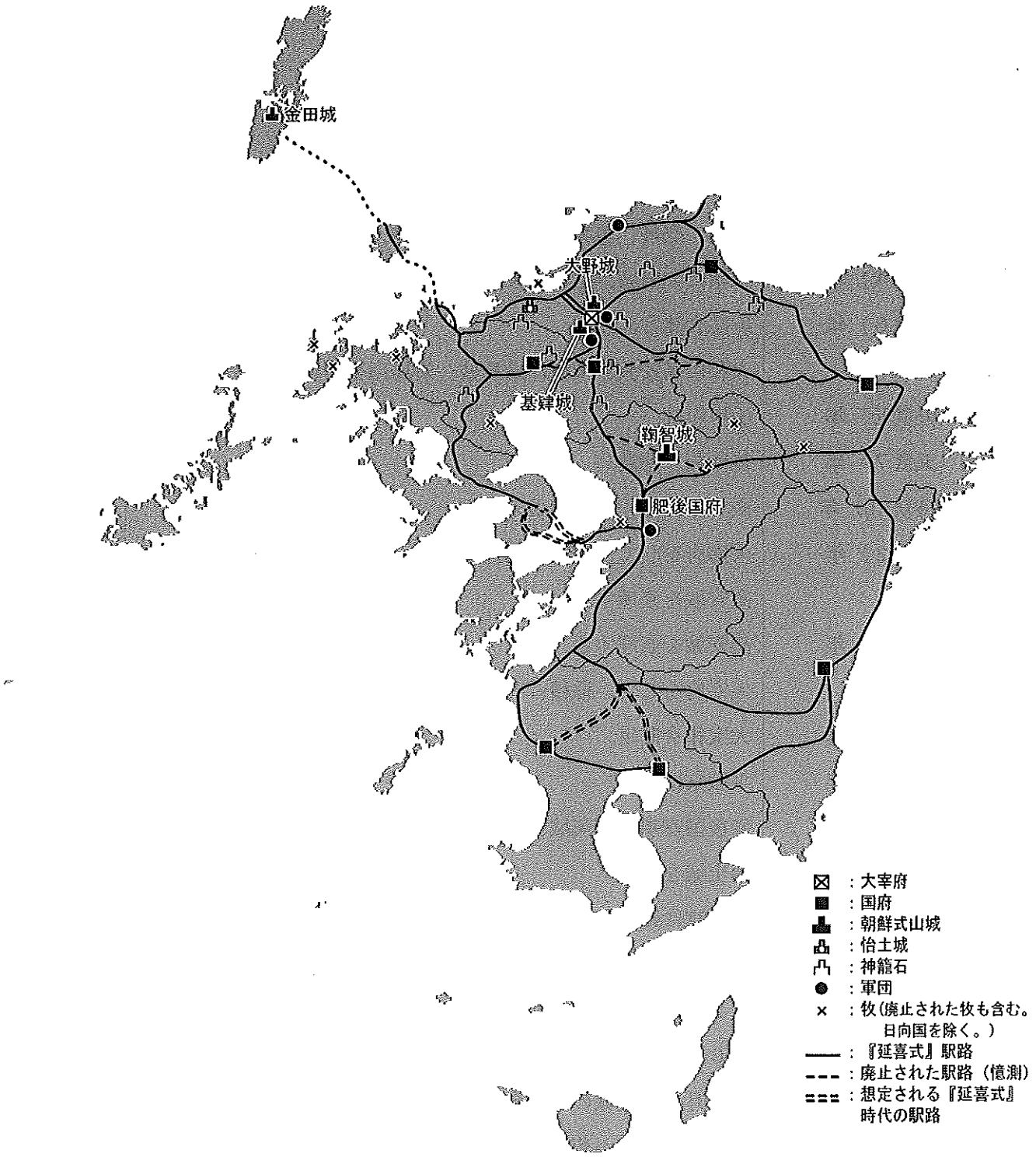
米倉

兵舎

板倉

歴史公園
鞠智城

5．鞠智城関連マップ



※日野尚志『古代の官道』（鞠智城・温故創生館・館長講座資料）2007 を基に作成。

６．鞠智城関連年表

西暦（年号）	内容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化２）年	改新の詔の発布。
661（斉明７）年	朝倉橘広庭宮に遷宮
663（天智２）年	白村江の戦い　※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智３）年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智４）年	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667（天智６）年	近江大津宮に遷宮
	大和に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城を築く。
672（天武元）年	壬申の乱
678（天武７）年	筑紫国大地震
696（持統 10）年	※「肥後国」の文献上の初見。
698（文武２）年	大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治する。
	高安城を修理する。
699（文武３）年	高安城を修理する。
	大宰府をして、稲積、三野の二城を修理する。
701（大宝元）年	大宝律令制定。
710（和銅３）年	平城京に遷都
719（養老３）年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む。
756（天平勝宝 8）年	怡土城を築城。
794（延暦 13）年	平安京に遷都
799（延暦 18）年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。
858（天安２）年	（２月）菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	（６月）肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	（６月）菊池城の不動倉１１棟が火災に遭う。
875（貞観 17）年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草を噛み抜く。
879（元慶３）年	肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。

この電子書籍は、古代山城鞠智城を考える 鞠智城シンポジウム発表要旨 2009 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城鞠智城を考える 国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題
鞠智城シンポジウム発表要旨 2009
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日